



想
竺
著
聞
奇
集

五

^ 13
1186
5



15
1186
5

門 13
號 1186
卷 5

想山著閑齋集卷の五

目録

一 朽谷観音利益の事

一 蛇の執念小蛇と吐虫と事

一 天狗の連打まゝと鉄砲の妙と吹来り者事

一 には蜂の酒英つぼ蜂の飯事

附蜂記の事

一 馬の言云ふ事

一 狸の人と化々相對死と事

一 磬石の事

一 蛇貝り観世音菩薩現し居事

一 蝦蟇の蟬と養と事

目録

興澤氏
藏書印

- 一 線道雲猪と截る事
- 一 綏縁乃ゆきと天兵と捕る事
- 一 猫俣老漢より化居る事
- 一 弟本於と化居る神社の事

柳谷觀音利益の事

京都西山乃内陣の方よりあり之里中より楊谷と云所

あり之のあり五願山楊谷寺浄土宗粟生先明寺末とあり寺あり

畧縁記の記より一亩山八人皇六十一代

平城天皇の御宇大同元年釈迦法信都草創の地

幸言ハ子目も眼観者菩薩脇士ハ將軍地蔵菩薩の天也

右に言ハ春日大明神の活祀とあり或は化人の化たり

主権觸ハ定徳洛東に在り内裏中ハ化人の言と蒙りて

西山乃柳谷と云く感得より一建てるありとあり

とい傳ハる後弘仁年中弘法大師も此山より十三佛の

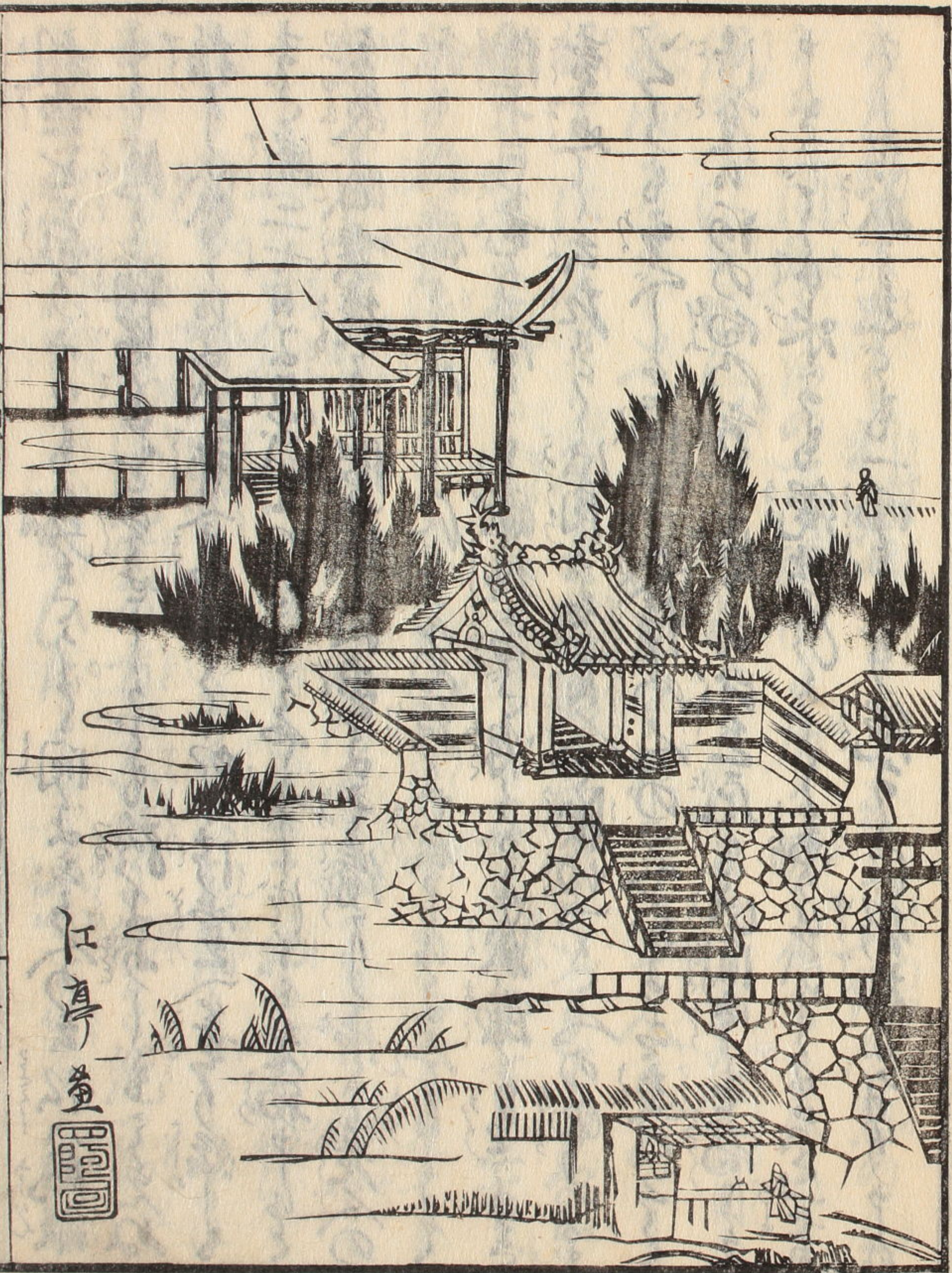
石像と刻ミ溪谷より安置するありと字今も其意心

僧都も此山より入りて飲来淨土の修行ハ此地よりあり

石正に多佛三昧の法に於て菩薩常に本運を
 久也を淨く各々各々又
 白門院 勅令に依りて水鏡之七堂伽藍と建てる
 莊觀より一に其後地震兵亂あり破壊せしむるも
 の重たし海より一奇蹟多かりしなり其長の願
 室室志蒼と人南あり堂七間四面の佛圖と建てる
 多ひるが所今の幸堂の代々
 帝乃 勅額ありし 淨信作法しむ
 東山院 靈之院乃 勅額ありし 淨信作法しむ
 量室是海と入り 勅額ありし 淨信作法しむ
 まませし 時幸きの昔の唐名を外名を淨信作法しむ
 新崇賢の院も淨信作しむ 淨信作法しむ 淨信作法しむ

子親音乃 淨光の中又西國二十三年前の靈像と刻ま
 れ法をせさせありし 淨信作法しむ
 危殆横死横難とまぬるをさせありしなり
 天保九年戊辰乃六月に寺へ奉納せしに人
 後より淋交山寺の道で堂内より二百六十人も薨り波
 唐く本言と云ふ 唐より餘り作らるる薨りくありしを
 其故と歩行しは菩薩と祈願しむるに徳病と念ふありし
 中うち別々眼病と念ふありし故多分眼病の者薨り
 唐より一より一悉く眼病の世をえりし眼病の念
 多しなりと誓ひし 靈験の事と同し皆口と指し
 一切の眼病はは菩薩と信しむるに治しむるなりと誓ひ
 新つよは河も餘り廣大なる異法及なりと誓ひ

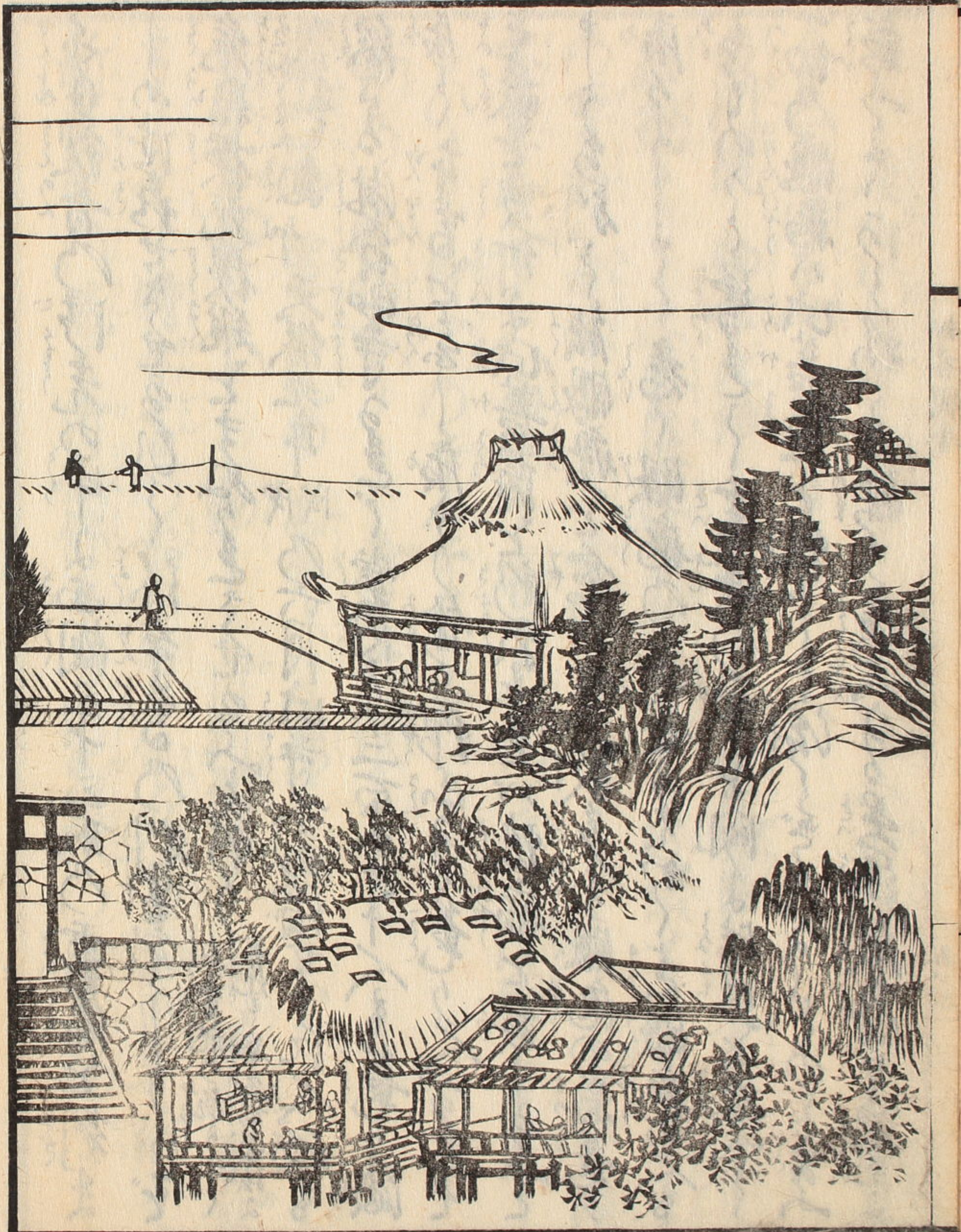
柳谷觀音



江亭
畫



五ノ三



利益とありけるも多きうく同よき人の云私ハ風眼
うく修諸君もとせせうも修よあしもえぬ
相り成りしよは寺へ来るくハ法堂へ養り信も
まご漸二七日よ及びりぬよまや少一けくえ物中
云故感嘆擔り傲せしに成りよき傍り居る老人の
私も月禱と成きしにえぬ夜は成りしよ人自らて
僅十日養り居りて眼精をくぬくろく成強よまご
事也く云たりては内よる盲人と成切し人の脚つる
くくもあぶく同り又傍り人のくかふる更ハくも
法堂の河の向り方よ居る比並尼もは回中をるえ
やききくも水も繩傳ひゆく氣のひひくよまご七日
くハ成りしよも一暇より繩すに相相よるりやん

あまのりハ早く利益乃ちうくく又傍り者の云
くハ回中をる河の二乃段を居る境よもまご
繩すに水に相りて成りりはまごも美の盲目と
成居るりくく之を向り信も今然りハ盲人もあり
相りしにありりりり云信然も同くよづもあふ
時まごよあく送くまきりく一七日或ハ二七日三
うく大く治くくまきりく海の中をて七日五七日
知るも四段の信をま人の信心乃厚為るもより病
よりやづく先治ぬハ四段をくまきりく初め堂に向ひく
たりの方ハ阿弥陀堂乃居るの念氣痛くくんに
幸堂より右の河法院堂の方ハ美遊子細き繩一
張を相行成事くくあし居るがけ世とせく後能

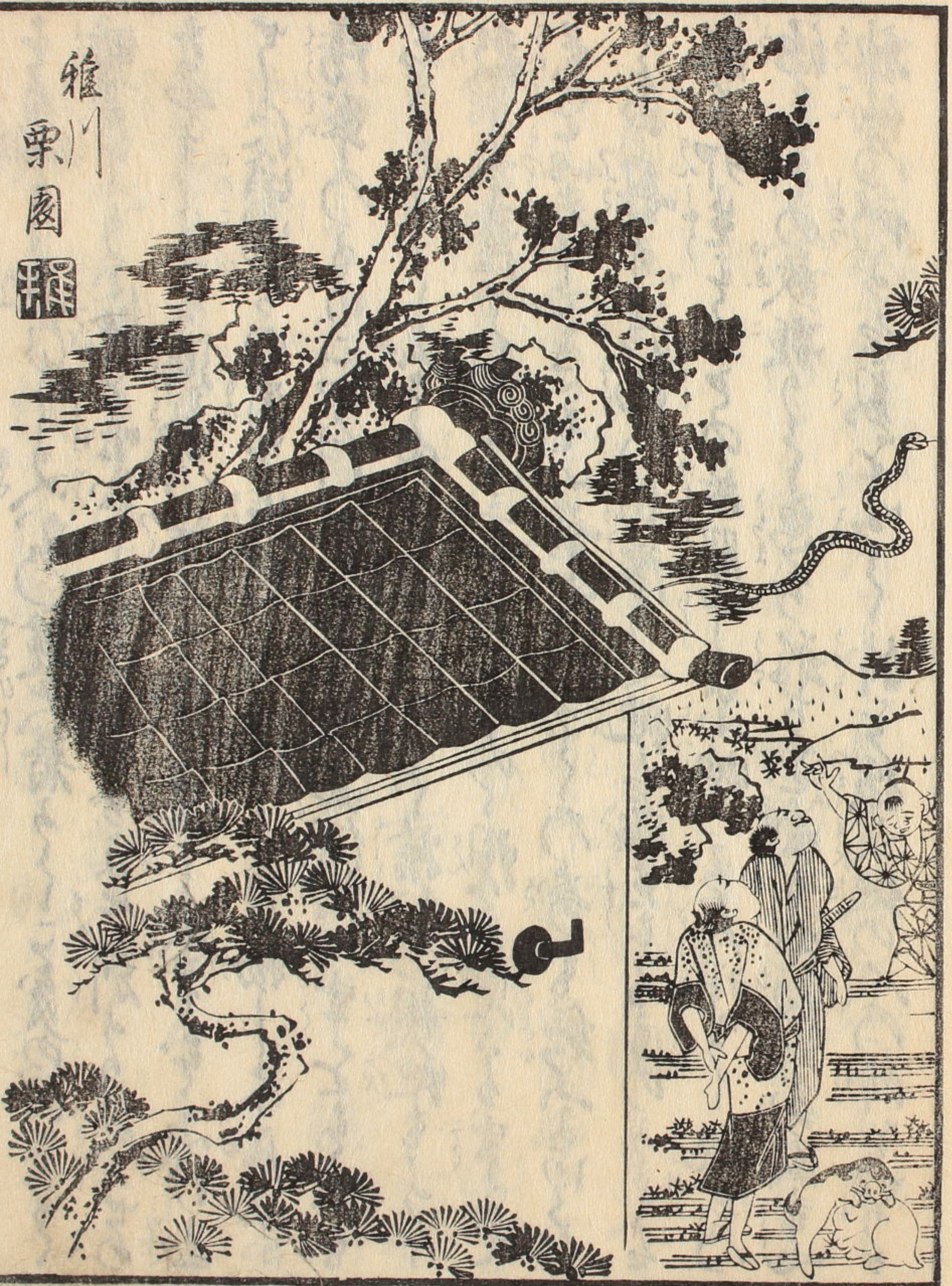
見るよ阿弥陀堂の並びの方より廟をく目の見えぬ
よの右徳とくうりくく使へたのうくく目と居
うらあもその徳は使くく物ものくくもくく人の
悉く利益とん使物くくゆりり事くく思ハ感涙も
止あ業くりく徳とりの利益乃事と教名阿弥陀堂ホを
何故書形くくくくも玉屠り思ふ事くくは堂よりの
菴るくくハ新あ事くくも内くく病人乃んせくく
も兼棟もくく徳やうり門前乃たあよむを夜前
本を夜前とくくくく業をくくは二形くく右菴り
人の禁出くくくく事くく平もは家よ入くく
せくくも没乃事多成ハ今くく多人救乃合事と捨入
居るのゆり冬ハ人数減くく六七十人と成其ハ二三回

四五百人も印の事くくくく幸堂のくくもくく
阿弥陀堂ホくくくく菴り居る事くく其も廣大
を色乃妙智力ある故業くく諸人よあせくく後見
波文の事とく修記くく
地乃執念ハ地と吐き事
續別言松の内ハ地くく一考乃林山とくこの
林も乃毛よ去後ゆり去去後乃意の庇よくくめ業と
無く出入くるありハ方ハ業あり
るハ二回徳福くく回ハ松り去後を或時チサ守
早の祭もくく地は去藏乃在根よりハ去藏のまど
庇くく雀乃業と目ハ思ハ入居くくこの在根ハ
ま業と移くくハ花想くくくくもくくハ二回徳も福

居るまゝ花後りひきぎ〜もをより下へ〜と居る
ども又面々樹と傳ひてえ乃と花の根根より来り
初め乃〜の葉とみ〜居る花付たるより及〜も
形〜下へ落り形のごと〜まる事色花十日程及〜
ども花思ひ止む〜花付たる落る事数十日〜
〜もつよ〜精を教〜身命と抛〜花付るゆゑ
〜後ハ如何〜思ひい〜治身は見物乃
くも多〜集ひ〜目も難〜終日うぐめ居る〜
〜角〜乃花後り勢ひはより小地と想〜その
小地ハ意の〜花付こま〜又花付ひきぎ〜下へ
落〜ま切は死〜ありぬの小地ハ如何〜目も居
〜の〜葉乃方〜迄巡警時の内〜忽ち二三月の太ひ故

花成雀乃西子と存るよ吾は〜と居り〜
〜く〜竹き〜持来り〜下へ落〜西子と吾は
〜〜みも〜を大勢乃強〜る〜ハ竹の若も
形〜数〜捨〜り〜事安永年中乃事〜
〜の林も畑乃隠居竹葉の着〜り〜現〜は〜
見居〜り〜〜廣野清助と云人〜
餘り奇形乃事〜〜自男は見〜事〜孫を孫〜
めと〜〜と〜や〜は〜文政十二年の夏
清助乃近隣は小石川中天神下或方乃と〜陸を
右天神下の水道端〜四尺餘乃大蛇と〜人〜
歌の〜〜は〜を焼火着〜〜歳夜も〜
〜り花を若痛よ〜〜〜も〜や死〜

猿
栗園



蛇ノ執念

五ノ七



とる頂より白ひく又かの焼火着うくこゝの海せらる
時ははより小蛇と吐出〜つりさきかよ先刻より久こせあ
ちるまき〜つる漁船の陸人も肝と流し思をまどひげ出
せ〜は小蛇の者と逃行つり傍り見物〜居るふ
傍車のものこやひけ〜ハハ竹板の事とよまふも
ち〜とよ〜とよ〜とよ〜踏踏〜捨かの親地も〜
殺〜捨〜とよ〜毒のりもの〜明〜見〜る事とよ
是とよ〜とよ〜とよ〜前後列〜の奇も疑ふは〜
〜の具〜法物のお傍り〜地を踏ま〜るもの〜
卯生とるその故腹中〜小蛇のまた理〜観念の
海〜その故凝〜忽ち形と成〜るぬる事成事〜
神仙の湖〜とよ〜とよ〜竹と扱又他の人の神とりの

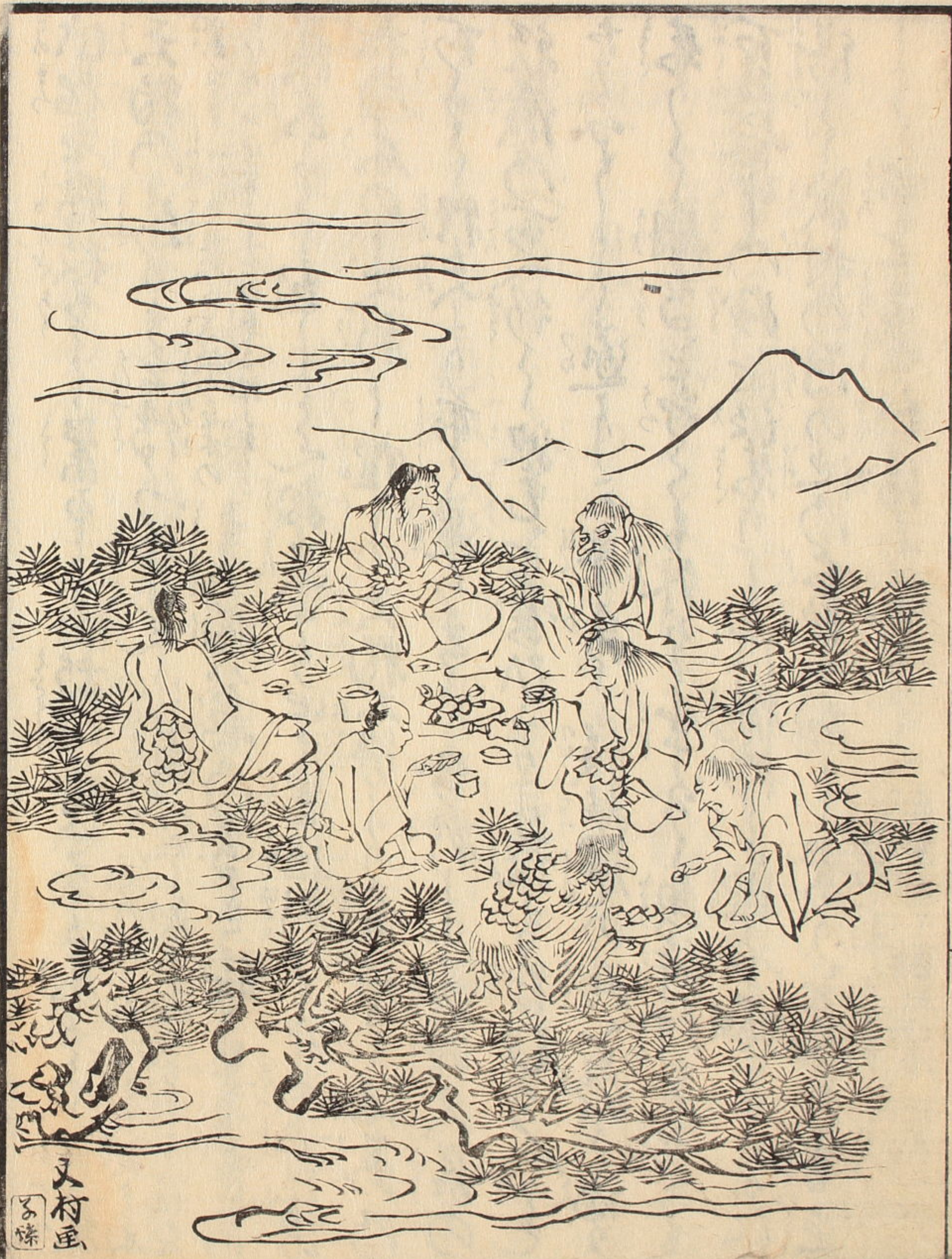
事もと成と鉄掘仙人の〜自身の神と成出〜る類も
つりと成るふ似〜る事〜つり蛇執の馬交事と成る
也
我國名古名鶴重の真廣寺の光僧は記と因〜て〜
〜と京之条の佛現寺の住持所教中の因ゆ〜この
證具寺の本願寺の法使僧より〜も運回〜て法話と
ち〜居〜る〜とよ〜本堂の裏の方ハ雲霧う〜る〜
高〜とよ〜屋根の瓦の回り萱葉と想居〜る〜
景〜とよ〜居ると下〜り地の風〜見え〜る〜
景〜とよ〜の傍居〜る〜首とよ〜とよ〜も竹を
嘗〜る〜事〜も〜時〜ひ〜〜とよ〜真成り
とよ〜居〜る〜後〜修〜例〜は〜焼〜び〜蛇〜を〜更〜切〜は〜死〜り

千時り見立を居る離島も死く二丈も四丈も二
落たり是行故と云事更にうらびお右の産と
料理見ると腹中よりうらもかき乾飯は居る故跡
のと腹と製見るとよけきも小乾飯は居ると
現り見るとあり連文政二年より右古を乃か願寺の
惣而もあつとてとてとてとてとてとてとてとてとて
もさぬ八丈回松の事とてとてとてとてとてとてとて
記一海魚ぬ

天物り連文政二年の妙と伝来りし者の事

文化二年卯の事故が養濃郡郡と松本皇村よま五郎と
し若る年十四の時裏りて風呂入居りて天物とて
先自らの家の入口よま三國社の松の本の梢(行)りて

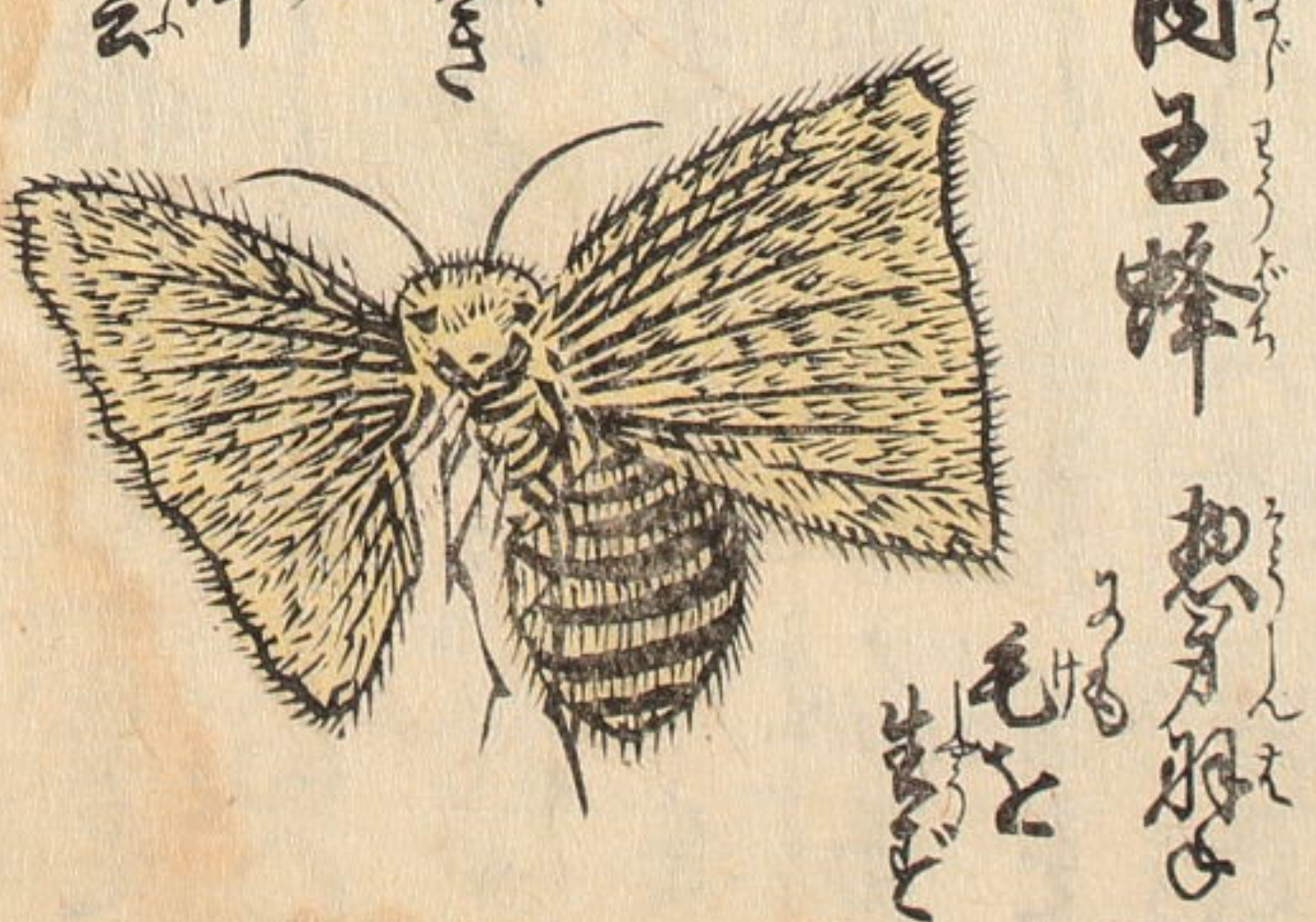
は松を鴨枝とて葉も枝おもせざる本ありて日
天物り来るに伝つる本は
葉も一切の葉ぬは枝の本の
たりたる事八十七の巻に記
類多ありて相まより四千里程行りて十聖堂の
松の本の上へ行りて種々の天物大勢より合居りて酒席の
ありて松支より市連らまて歩行りて或時大石の
乾飯の面へ行りて地を食ひると誰も咎むる人
たりて一二年居りて後決地のはと伝へ
ありて翔鳥とありて外りて事ありて惣持行とありて
百段石中の妙と伝来りて後備席と伝へて
伝へて松村の石の池の大地とありて葉ありとて思ふ書並
西とて云行清志とてとてとてとてとてとてとてとて



又村屋
の味

海居る故危急の 叔もまきまき 行く肉は稲乃穂とよて
 揺せらまきまき 叔もまきまき 行く肉は稲乃穂とよて
 出来の悪妻のも河の田乃出来の悪妻のもま天物が
 我もまきまき 故う稲乃出来の悪妻のこまひと
 叔村乃まきまき 近隣乃事まきまき 友達の事まきまき
 のりまきまき 世僕乃まきまき 八波乃まきまき
 おもまきまき 右の通り之三年乃間の天物具乃咄ハ世く孫
 事乃まきまき 右の通り之三年乃間の天物具乃咄ハ世く孫
 には蜂乃酒并へば蜂の飯の事
 附蜂記の事
 養濃の國郡と郡よには蜂と云ふ原野は完と揚
 ける蜂まきまき 母老の蜂まきまき 八波ひまきまき 網籠まきまき

大指狂のちきめ〜黒く多〜大さ形状ま川島の西
 蜂なる〜は蜂の穴と似〜二尺餘りも蜂の巣
 物〜めりる灰穴の〜なる壺と蜂の巣の〜をりたる
 日のお〜捲く〜中の〜う〜を漆と能塗〜〜水
 漏ぬ捲りなり〜中〜多〜成花の落と似〜丸来りて
 入壺一壺の壺る〜又
 ちきめ〜のう〜蓋と
 捲く〜捲く〜又〜の
 西りに貴にも捲りる
 あり多〜のに捲りて
 ちきめ〜位ものもりの
 壺入壺る壺と人〜



二子蜂

回子蜂

惣子蜂

蜂の如し
蜂の如し

毛と

けち酒連帳〜音事〜
 論〜ものち身〜の事〜〜
 義〜家〜の古事琳の〜味ひの〜も何成〜
 一壺〜と百文〜買ひ事〜小虫〜冬籠の
 食と〜造化自然の妙〜感〜
 免〜の名と〜色〜も豊年〜飢饉〜
 地〜の〜強〜其も南〜芥〜政事〜

或は下の難儀いと云くハ願ひあらぬのハは爲る族
多し蜂より芳りぬる事之を蜂の肉のまじり作
る事このも居るごとく事ありり如何と曰ふ王ハ蝶の
卵より身の色卵の色細き毛と生じ居る是も前
より生じたる卵より生じたる王蜂ハ一穴ハ一足居る
数足居るりと曰り五六足も居る多きと十七足も居
り一具王ハ穴と繋ぎあはるも生じ出さるる故蝶蜂が
いふあるまゝと云ふもその壺もあはるべし形も云々
その穴を掘りて蜂たかりある故側ハ蜂を悉く焼
捨る者三人居居るは其も福も成る事と我
ちりしは色ハ名類の中入る蟻時を焼難きゆ念と
む此蜂を蟻と云く痛きゆりやうりやうり尋常の蜂の

蟻痛む程りたる中多く焼時ハも二子も焼
殺す事と我花の露をばよ命とある居る何れハ羽の
もの脇の下の所よ付来り澤山あるのハ豆粒程づ
付来りもまじりの蝶蜂も時々花と吸よ出るは元来
蜜蜂ハ捉ふ事そののみ多し群り居るものもまた
多し乃れ吸ふは花と元々のハ巢と造るも巢と造るもの
花とまじりて時々入替りて其夜とびむ中よ
黒き性の遠いハる強き蜂十中多く是と云信細
工人と唱ふは蜂園守の園と守りぬ又換水遠使の
人と花とまじりて穴の口と守りて元蜂乃れ出入と換め
着花と持来りて穴よ入るものもバせりの
悔急と責り入事と作らむと再と怠る者ハ遠よ



秋若



養教一々軍令を約ふは異なりと申すは大王云々
 大王成蜂正正一ツの巻と構へくは而と居るも是れ
 の原ハ必右の巻乃と云々も一ツの巻直一々君と
 守復りも其のに似たり王乃子と世々流る王成
 えり花と云々も一ツの巻直一々君と
 玉一柳一正正の巻直一々君と
 回一道理は約一々異成事と云々も王も時
 括りも是ハ餘の巻直一々君と
 産も也量るるも一ツの巻直一々君と
 向ふか一々種々の作法も一ツの巻直一々君と
 山海名産も一ツの巻直一々君と
 散るも一ツの巻直一々君と

鹿と鹿者ハ山と見らるる金と擢む者人とも見らるる
 右後乃か竹分山中云氏乃元事故又後ハ心と云
 見極るる人々も一ツの巻直一々君と
 又ハホ蜂と云々も一ツの巻直一々君と
 少も一ツの巻直一々君と
 乃ハホ蜂と云々も一ツの巻直一々君と
 完乃中ハ再乃乃物ノ原ハ
 形ハ傘の如くハ一ツの巻直一々君と
 哉蓋も重箱も一ツの巻直一々君と
 その一ツの巻直一々君と
 佐別本曾若乃色り一ツの巻直一々君と



は蜂も焼殺せしむりに穴と蜂蟻く件乃菓と丸菓
中よるもの向く柳担のぬきまふとみく蜂仲と味と
はけ飯と替く者よりくる中へへ飯ころころと
へばりしころころと蜂蟻とと食意するものして
収め食する事く風味ハ油多うく香くく菓子
うまうまのものころころと御も名古色うぐりりする
そのハ蜜味あるころころと海食ハ多うくも多うく予も
喰試くもも佐別人や羨濃人の収めく食する種ハ
風味のころころと海糖菓子小瓶のころころと味はく海漬
のころと収めく食するものよりくも羨濃ハ酒類と菓
うくも蜂みく黄甘より酒の者くくせごもまらるる
飯のころとみくも蜂飯くくくする事も何りく

を殺すくくもは蜂の事ハへば蜂く雷くく菓子よ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あやハ蜜にのる復くく糖の事とあくくくハ菓子と
の松よあくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
書記ハ色にのる糖ハにきくも名古色くも居る蜂く
既右類よりハ糖度のはる菓子山別庄ハ園中より菓子合
蜂みく食するくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
種ハ菓子居くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
居る菓子よ日くくくくくくくくくくくくくくくくくく
菓子居くくくも菓子居くくくくくくくくくくくくくく
菓子もゆえ九月よ菓子くくくくくくくくくくくくくく

ちまう〜と云ふ御神もさる故九月の十六日〜蜂の
子蜂一升容も亦事〜親蜂ハ皮割〜高〜南
味ハも〜あ〜さ〜色ハ収ビ〜る食セ〜も飯〜を食セ〜又
〜ま〜り月毎の食〜の〜り〜〜〜〜〜
出〜れ〜る〜成〜る〜の〜之〜母〜蜂〜の〜蜂〜も〜さ〜ら〜り〜成〜る〜の〜や
心〜け〜も〜〜〜〜あ〜ら〜り〜に〜ら〜蜂〜ハ〜本〜の〜枯〜葉〜を〜食〜つ〜て〜死〜す
〜入〜〜〜〜〜〜〜と〜産〜卵〜産〜〜〜〜〜
蜂の葉ハ水ハ泡と丸成り〜ま〜は〜漆〜と〜産〜卵〜成〜て〜採
〜ふ〜の〜あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
成〜る〜ハ〜泡〜形〜の〜小〜虫〜と〜〜〜〜天〜子〜自〜然〜の〜妙〜と〜云〜ふ
ち〜ら〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜種〜類〜盛〜せ〜り〜も〜さ〜ら〜り〜成〜る〜葉〜と
怒〜る〜も〜又〜完〜は〜葉〜と〜作〜ら〜る〜〜〜〜大〜目〜小〜異〜種〜を〜採〜り

本草御目り土蜂山谷穴居作房赤黒色最大螫人至死
亦能釀蜜其子亦大白〜に〜蜂〜を〜蜜〜と〜産〜卵〜成〜て〜云
は〜蜂〜ハ〜能〜似〜〜居〜る〜も〜人〜と〜螫〜〜死〜す〜と〜云〜ふ
あ〜ら〜り〜の〜種〜を〜採〜り〜葉〜と〜り
蜂籠〜ハ〜蜂〜の〜數〜方〜群〜死〜〜〜
〜さ〜ら〜り〜成〜る〜時〜ハ〜家〜籠〜も〜群〜を〜集〜り〜て
重〜り〜成〜り〜合〜居〜る〜事〜も〜亦〜本〜草〜の〜ち〜ら〜り〜と〜同〜も
十回も少〜の〜ま〜さ〜ら〜る〜形〜半〜面〜〜成〜〜こ〜ま〜り〜居〜る
と〜同〜一〜面〜居〜る〜ま〜ら〜り〜又〜一〜面〜も〜成〜〜竹〜造〜つ〜揚〜紙
初〜の〜〜蜂〜を〜採〜り〜居〜る〜穴〜ハ〜〜〜
竹も食〜と〜その〜動〜も〜せ〜〜
数方乃蜂毒一致〜各自然の〜者〜ち〜一〜奉〜り

飛来り〜又一舉に死ねも命一軍令もあらず敗れ
一致〜一軍とよみてと降れ〜も是は比〜る事
かた何成りけり〜新降記〜るころ多〜ぬ事ありと
云俗の世より云々の世〜より山中〜降記
時〜道も一軍も〜集り〜往來ぬ故は
焼拂ふ事〜云々の〜と〜降記
ゆり云々の本曾義濃〜の深山〜折良行あり
人あり

馬の言云ぬ事

天保九年四月八日の事〜東海道尾澤宿の馬
平塚宿へあつと付行〜折良平塚の馬拵は
付録〜せらる大破の方〜あり〜は回〜け

坂と約〜坂の松原より坂あり向より大破宿の権者
り者の持馬宿と付〜抱の馬士事来〜故前抱と督令
物来〜付替〜あり〜道中〜
大破〜付来り〜馬の前も〜重〜故後沃の馬士
乃多松は折角整〜もは折良〜重〜
我々の馬〜付替〜止〜大破の馬士
未嘗〜さる〜彼権者の馬人の世り〜の松
毎日〜重行と背負〜る末の眞利〜る者も
云〜あ方の馬士〜外は〜者も
徹〜驚き〜忽ち其世た右の宿中〜安〜権者
の馬士が馬と他道成事〜松〜と懸〜彼馬士も
〜夜逐電せ〜我

馬士の名も後〜
あはは志色〜

馬士長まじながの悪者あくものより常つねに書かのうらに重おも荷にと撰せんぐが馬うま
二匹ふたひきを八十はちじゅうと二匹ふたひきの甘あまけりしけい百ひゃくも前まへ言こといたを
小こいりまの故ゆゑ藤澤ふじさわの馬士まじ八はち目方めがた多おほき事ことと云いふ人ひとの
物もの束たばをせしつども二匹ふたひきゆりり貴たか目め故ゆゑと云いふ事ことの
妙たぎい云いふるなり権けん者ものの馬うま八はち美み馬ばの價あひひもま
金かねより朱しゆ印いんと文ぶん支しと云いふ八十はちじゅう貫かん目め位ゐの行ゆきと事こと共ども
坊ぼうども百ひゃく貫かん目め位ゐも使つかひ附つけ鹿か毛けの七しち寸すんを良よ馬うまとぞ
物ものと云いふも前まへおのれ貴たか目めの定さだりも多おほき物ものと云いふ物ものの
有あり事ことあると云いふ地ち道みちよきい利あり主しゆ人ひとつと一いつ丈じやう分ぶんの
價あひ法はふと出いで一いつ丈じやう分ぶんの價あひを色いろの情じやうより云いふ事ことの
明ある事ことよのきをい捨すてて故ゆゑの事ことなり建た馬うま方かた仲な海うみ
のこも甚おほき悪あくく勿な論ろん安やすく云いふ事こと馬士まじと悪あくまふい

なかりし昔むかし京きやう方かたの公こう方かた義ぎ懸けん公こう列れつの粟あは平へい公こうの
の里さとの陣じんと云いふ事ことと云いふ事ことは病びやう場ば重おもらせのい徳とく
元年げんねん元げん世せ六む日にちは焼やく事こと其その前まへの夜よ十じゅう日にちの馬うまをり
多おほ量りやうの馬うまの中なかは元げん二に回かいの馬うまをりつらと云いふ事ことの華け毛け
の馬うまをりし人ひとの妙たぎい事こと今いま叶かなひぬぞや云いふ事こと
又また隣りんの河か原はら毛けの馬うまと云いふ事ことと云いふ事こと何なにも云いふ事こと云いふ事こと
も云いふ事こと前まへの馬うま九く共ども重おも居ゐる中ちゆう間かん小せう者もの多おほく居ゐる
くは皆みな毛けと云いふ事ことと云いふ事ことの云いふ事こと事こと義ぎ懸けん公こうは
此こゝの毛けの云いふ事ことと云いふ事ことと云いふ事こと次つぎの日にち將まさらぬ
義ぎ懸けん公こう焼やく事ことのいし一いつ丈じやう分ぶんの事ことと云いふ事こと物もの際せに
り二ふた丈じやう分ぶんの目めと云いふ事ことと云いふ事ことの根ねも未ま燃も成じやう事ことと云いふ事こと思おもひ居ゐ
る事ことと云いふ事ことの昔むかし居ゐる事ことと云いふ事ことと云いふ事こと新あらた今いま目め前まへの事こと

さらハ故妻事故妻後記一色ぬ平は成年と京せんと
 月八日八日と後足一々堂九日は成後君と通り也
 一々もい活と成とて翌十日の早朝平が荷物と
 付つら馬士ハ小田系君の子女一々者も一は者の世
 昨日の馬の世と成一故産實成行つら一は成者
 まぎ一々の権者方一は一見てありやの早馬を
 運連と後法平あり一祈り居りの中馬のその云
 事ハ出来や一まぎも成一悔り餘の世道なる
 幸ハ一と一王入と一又道一の成事一の成をい
 捨り一故一故馬駒親音極の馬ハ成勢一と一のと
 作りと我くと成めありせらまの成存成りゆ一果ハ
 成りありふ一成ハ一の權吉の馬士一卒成回者一



馬ノ言

五ノ十九

花狂
雅山画

居る右馬士の言葉なども知居るは情と飽し事な
 ともお作りするは其は佳成事にお彼も云あり
 言葉と合入る馬と得るは毎日重荷とシヨハ
 未の真判がワルカベト云うると馬も別る故西の部
 云うると云うるはもの事之馬の云云一幸外と云
 何と云ふは御道西行の道と云うと得探るは枕木
 云うると云うるは事ハ何れも現る云云と云うると
 即ち云うと漸成候今ハ何れも年俵若くは道中
 ありと云うるは村と云うる海道よりいさの村ありて築面(昔)の村
 我本を治る候と云者多々高賣物と云うと我の身代
 成しか件渡五郎と云者馬と好く云馬と好く云馬と好く
 自荒うと云種は馬と責叱り人よと突然して喧嘩と

好く云うると云うるは鹿毛の馬と名馬と名馬と名馬
 老母の夜半の頂も本は朝の鹿の前と云うると云うる
 馬の言葉を教へて毎日の重荷と甘くを方おの
 ころと云うると馬と名馬と故荷の重と事ハ又種大候
 りと云うると云うるは家の息子の自荒うと云うると
 笑ふる故は馬はらと成りへき一後五郎めと云うると
 一命の再び馬と事せざり一是は吉原若の馬士
 谷五郎と云者乃望うと云谷五郎ハ初め夜次高居る
 後五郎と云友達あり一馬の事と云うると後五郎ハ
 急めと云うると事ハ並に馬の腹と云うると
 漸く癖多し行と常一駄さびけはけ時より云

二匹ぬりも付る故馬のトせし初めを御座る事之述
 在るの事能知居し世せりまご文政七年以よと別
 大浦船主柳村（維林領）七左衛門の持馬赤鹿毛の
 云々よりと云世し先年安重くも前生の事おと
 尔し余の面合とてする事よくも首尾もかく連漢
 せどと盧冥舟のつご故書載乗より物よし探り尋
 重慶との之跡り多し高類もくも程ももくも
 物程よりと云又川童も能人活とてし猶候の類も能
 人活とてしと云と程りつものぬが馬の云々よりと云
 月のと改変事と思つる又云寛政年中の事よと云
 東海道坂の下若乃馬と山の若乃河乃夜食也
 とりくぐらむと聖朝鈴鹿乃坂と牽とりある時馬乃

言云たるよははさの相場花脚乃重荷と附く逆走り
 一よりハ何れもくもくも腹もくもくも若変事と
 云ありとの事風り奥居り支より馬がその云鈴鹿
 乃更ごと云馬と噴出来る今には噴き諸國より汎ふ
 事とのくも是も成年毎行乃事ハ坂の下又ハ鈴鹿もて
 馬と其よ尋の探るに馬乃その云と云事ハ水もて
 ぬる其馬がその云鈴鹿の更でもま女席あるのせと云こ
 ともありまよバ馬の云云事もまよと云或ハ故程
 馬がけ島くその中た目見えまよると云る故何たり
 せしと尋るにたま女席あるのせと云りゆりたを見
 えと云と汎ひまよると云と云と云と云と云と云と云
 尋るに一向かり兼隆と云と云と云と云と云と云と云

類も十二八九五ハ九箇なる事多ク又面をこせり虚
多クも六世の如く書記のまじりて取捨多ク其も怪
成事乃とと撰くある一並之物を以て珍鹿の事も
馬のまじり事ハお遠くも松又思ひるまじりも九箇ある之
あり多ク
又周果物活り武別神宗川のく旅人番と云く由津
けら故亭主の羽織と監と著く行んまじりり又ま
亭主の羽織なり何進志く行せ馬が物云又圖書よ
江別く或家(盗人)入く物と云く出んとまじりか
馬進延くまじり物と云く又進延く又進延く
皆同日の候なり
程の人と化くお対死と云くたふ事

尾張の國豊田を井戸村 東海道宮宿のり 百姓の娘ふとこと
以女まじり生以月持悪友後進宮宿乃内築出町
御道船東の場 松原(出る)あり 逆形志くく扇屋をい云旅籠屋又飯盛
女く形りく勅居芝敷 船屋中村秋右衛門 異名と云進延と
ては誰志くぬ者とも云く海丸放流するものなり
同而髪結乃抱の者ハ竹く云男まじりくまんけく一匹
は男と悲ひ合く或日今夜中心 お対死 死無き
ふまじり云くは世男も其約束くく多まぬお男はく
考へ爰成約束とうせしもの哉ハ思ひまじりその夜
約束乃時刻も出る頃とハ竹のものうハ思ひ酒をく
ぎめまじり歩行く夜も更くはまじり約束せし事の
志まじりく一河なる女んく今御とさぞ侍候く居る

何れも男も事よふかゝりまの約束乃場而(母の)
控の上より知も南もせむやと思業と極めかの約束
場而(母)田村(兼中)所より秋葉乃森(行)見りる毎の
傍にたもたうとせむも更切もお産るの海(来)り毎の
重おと母ふよ九の比まぐハ居るも更より居るも
いふ尋ぬる義申之より外近きも是尋ぬるも毎の
何り而更よ志業新のま不審り思ひたぐりせん
たうと夜ハ更切にお産るりと相毎ハも秋九の時
物く約束乃(田村)秋葉の森(行)見りるよの
男も来り居る竹と(ひ)も又二三丁先(居)る
衆と云々森乃(在)本敷(と)も色もも物も
恐ら衆衆(在)市(の)男と之(り)漸夜も消えんと

もる頃よ及びく道の端なる樓乃木の六尺中より
五膝六膝よりありける枝よ腰帯とよりよお懸け
控の女端も一人二夜よ首と懸りて
死なんやうふよ世行(成)事(男)ハ(懸)く(本)乃
股(連)たりより女(童)ア(と)先(の)か(地)よ付(る)ま
死せんともせむも死るもせむとせむとせむとせむと
思ふ折りく早業も明後(り)懸り隣村(清)美(村)北(より)
の若色(り)懸りく(と)粹(と)見(く)大(よ)懸(る)も(能)く(る)よ
女(珠)乃(女)るも(も)行(指)よ(纏)死(く)居(る)ハ(指)乃
程(形)り(人)より(ハ)怪(ま)ゆ(急)本(の)股(を)物(と)も(首)を
本(の)股(を)物(と)も(死)居(り)女(ハ)更(切)よ(助)命(ら)う
とせむとせむとせむと(女)又(も)事(を)せむ(後)發(た)ふ



狸化

五ノ二十四



長
傳
鈴
堂
印

ろやうの髪結の男も少くもあまのこりたるは
 是ハ平が家僕沐地云者ハ井石田村の連隣本村の
 者あり一がの男女も竹馬のりの友あり去るも心中
 一々も女と程とては本は怒り居る所も近侍
 正妻見たる事とて是ハかの人と化す程とてよのたの
 野程とていふ事とてあまのこり昔のりは後のさよ燃相
 あり折とんと威一も後よあり一威一敷一なる事
 同くもさよ野色ありと大と大と揚村とていふ大と大
 火消道もなぐ持出を余見ると消失するなりとて
 程のりさげとてさうとて騒ぐせ又例の程のりは保つと
 たりとて悔の事なるといふ事とて行成ものなるも
 ありとてさうとては愛の後の悔あ事一なりとて皆い

程のりさる業のりさるりくも物と知

磬石の事

磬と云物の樂器のり石とて梅とてお故磬の字の
 六書ハ清石の字のり石とて梅とてお故磬の字の
 合とてさる字あり
六書ハ清石の字のり石とて梅とてお故磬の字の
 合とてさる字あり
 六書ハ清石の字のり石とて梅とてお故磬の字の
 合とてさる字あり
 小見え日本とてハ漢制白華のり一山ハ山肉懸磬石と
 一々大小数百子萬の磬重りたりとて山ありとて又とて
 皮と被り居るとてとて草本露の成りたる山とては山と
 一々一ハ之とて斗りありとて一京の愛宕山程の成りたる山乃
 ありとて又ハ産の成りたる山とて一懸一石の磬石とては
 寸ハ梅のり又とてさるハ二尺とて尺四尺位のともありとて

白雲のり二十又雪のり十七すゝのり月武のり人位まゝ
のりもまゝのり形ちのり丸まのりもと南のりとも
も種くちのりもまのりも共皆金鉄の音のりも
常の磬の音のりも石のりも響りのりも十のりも
春のりもは分律りの能合もまのりも先唐のりも能音のり
のりも少のりも大括りのりも時を書くのりも
芝のりも金鉄のりもまのりも能を十のりも七八のりも
金のりもまのりも響りのりもまのりも響りのりも
めまのりも少のりも付のりも能のりも能のりも
光澤のりもまのりも響りのりも響りのりも響りのりも
高橋白峯のりもまのりも 白峯文輝のりもまのりも 在江のりも
考のりも響りのりも能のりも能のりも能のりも能のりも能のりも

自身よ響りのり也のりよ響りのり也のりよ響りのり也のり
極上金のりも響りのり也のり也のり也のり也のり也のり也のり
見事の石のりも響りのり也のり也のり也のり也のり也のり也のり
勿海金のりも響りのり也のり也のり也のり也のり也のり也のり
のり響りのり也のりも響りのり也のり也のり也のり也のり也のり
大同炎上のり也

御所の磬焼くり連白峯へたのりも響りのり也のり也のり也のり
磬のりも響りのり也のりも響りのり也のりも響りのり也のりも
史を公俗のり也のり也のり也のり也のり也のり也のり也のり
内もまのりも余國のりも響りのり也のり也のり也のり也のり也のり
まのりもまのりも東のりも東のりも東のりも東のりも東のりも東のり
まのりもまのりも東のりも東のりも東のりも東のりも東のりも東のり

御所〜右の石と磬〜ま〜い〜ふ〜色の壺の
 殿後〜り〜る〜の風國〜河〜も〜さ〜く〜さ〜え〜る〜の
 左も〜さ〜ま〜り〜今〜頭〜意〜あ〜ふ〜乃〜井〜家〜〜用〜か
 不乃磬ハ皆悉〜洞磬の〜石磬と用ゆり事あり
 彫琢の壺ハ尋常ありざる故り予中年乃頃まがハ
 紫蓋り〜用ゆり磬と石つる事と志〜き〜〜磬と
 り〜洞〜の〜梅〜入〜あ〜か〜お〜と磬乃字を金〜り
 匠〜も〜〜あ〜石〜小匠〜ハ金〜石〜と〜名〜漢〜入〜あ
 その形ふ〜あ〜あ〜あ〜い〜店〜り〜ハ私〜あ〜こ〜あ〜あ
 一〜何事も〜あ〜ぬ事〜り〜〜あ〜あ〜と〜あ〜り〜ま〜く
 思〜ふ〜ま〜〜せ〜あ〜〜ハ〜同〜に〜ま〜り〜せ〜〜記〜〜壺〜〜壺〜業〜入
 尔〜ん〜思〜ふ〜の〜〜



面

著石

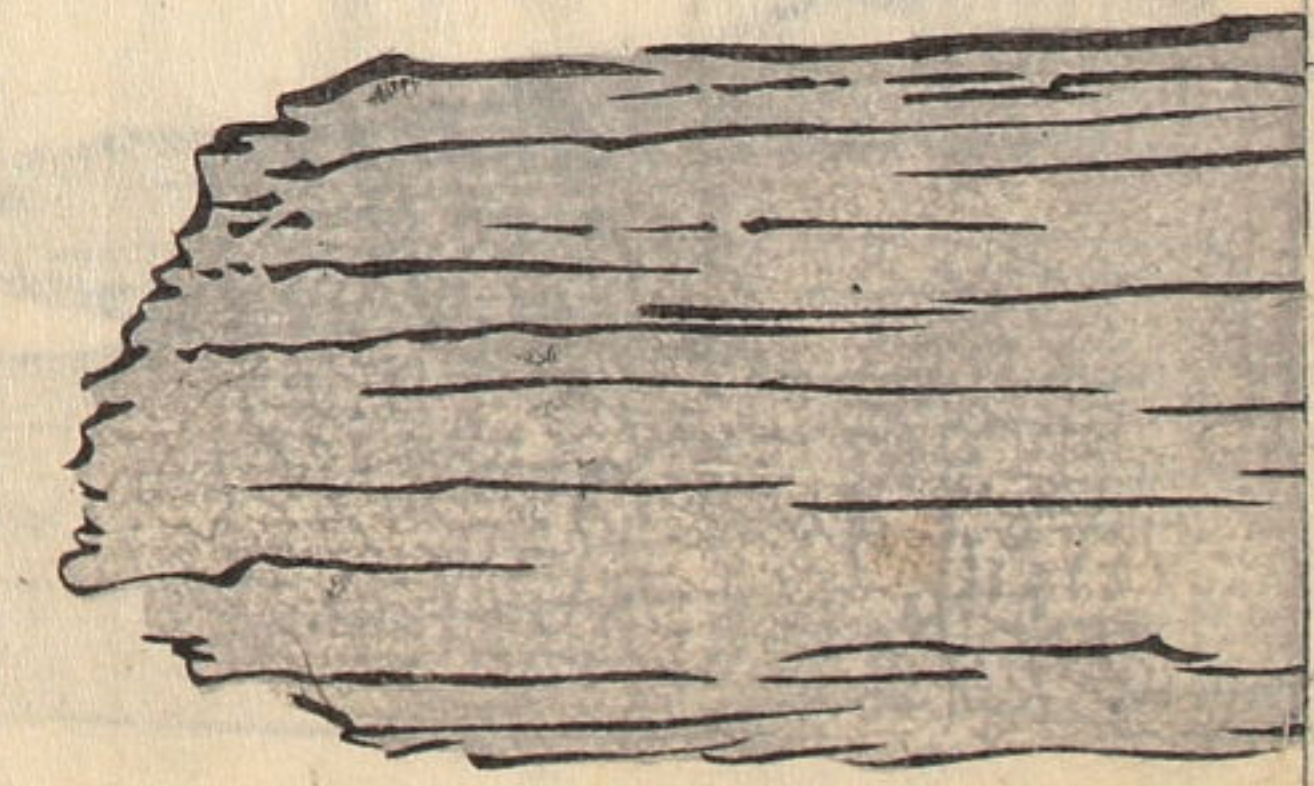
楯

狹筆家細川
 林谷奇石と好
 磬石教品と名
 一品と其字
 壺

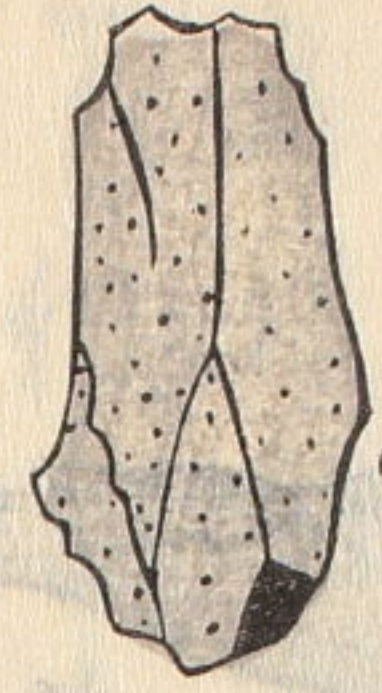
石質も大同
 小異ハ〜
 音も又煙〜
 金狹の音
 壺



裏



平が友肉藤廣庭は石と一川取持たり居をり
 う板成石之多を白目形は灰瀬よりあ
 石肌荒く麻う〜〜〜殺肌の色も大にハ
 如竹〜と云悉う〜磨けを楯文塗る〜〜あり
 お遠う〜は石片面の端の如よぶ〜大底をい底の方と



下にあり物〜〜おと島も又底の方とよ〜〜と物
 先沁も〜〜に近〜音あり
 或人云磨去るを種〜磨石を奉〜と〜〜瀛州の
 青石磨其長一丈修〜奉鴻毛の如〜〜云奉者
 見〜音も種〜〜〜濠州の石質〜〜
 ち〜其音金玉よ近〜彼揚貴肥の委〜〜監田の
 緑玉磨る〜の類なり〜〜

武蔵の四窪原に大井村末遠寺
 親世善菩薩の像現〜居〜の〜〜
 良縁〜〜天保十五年
 甲辰四月廿日思ひ〜〜の地

初く右の像とま字の来り〜とたよ書〜とゆ
来中ハ安房の徳士如琴庵の慈り記せ〜文をける故
是とも交り記〜至後今〜云よ及ぶ

海中出現觀世音像の記

杯は音像の安房國朝夷郡白旗村大う首の海士市五郎
とる者同色福聚禪林の觀世音と信〜朔夕末と選び
宿ぐらり約りに母龍とた〜た〜た〜色ハ白ぬよ是と九
おのもも又浮世波りのゆもぐと〜た〜ぬ時は文政十
秋八月十七日夜不思の靈夢と夢り〜〜が凡倍
まきバ内や〜も思ほ〜野邊が傍よま〜そ〜
海面波り〜り〜ら〜も波ら〜ら〜ら〜
岩根と母ぬらに志の〜ら〜龍の〜ら

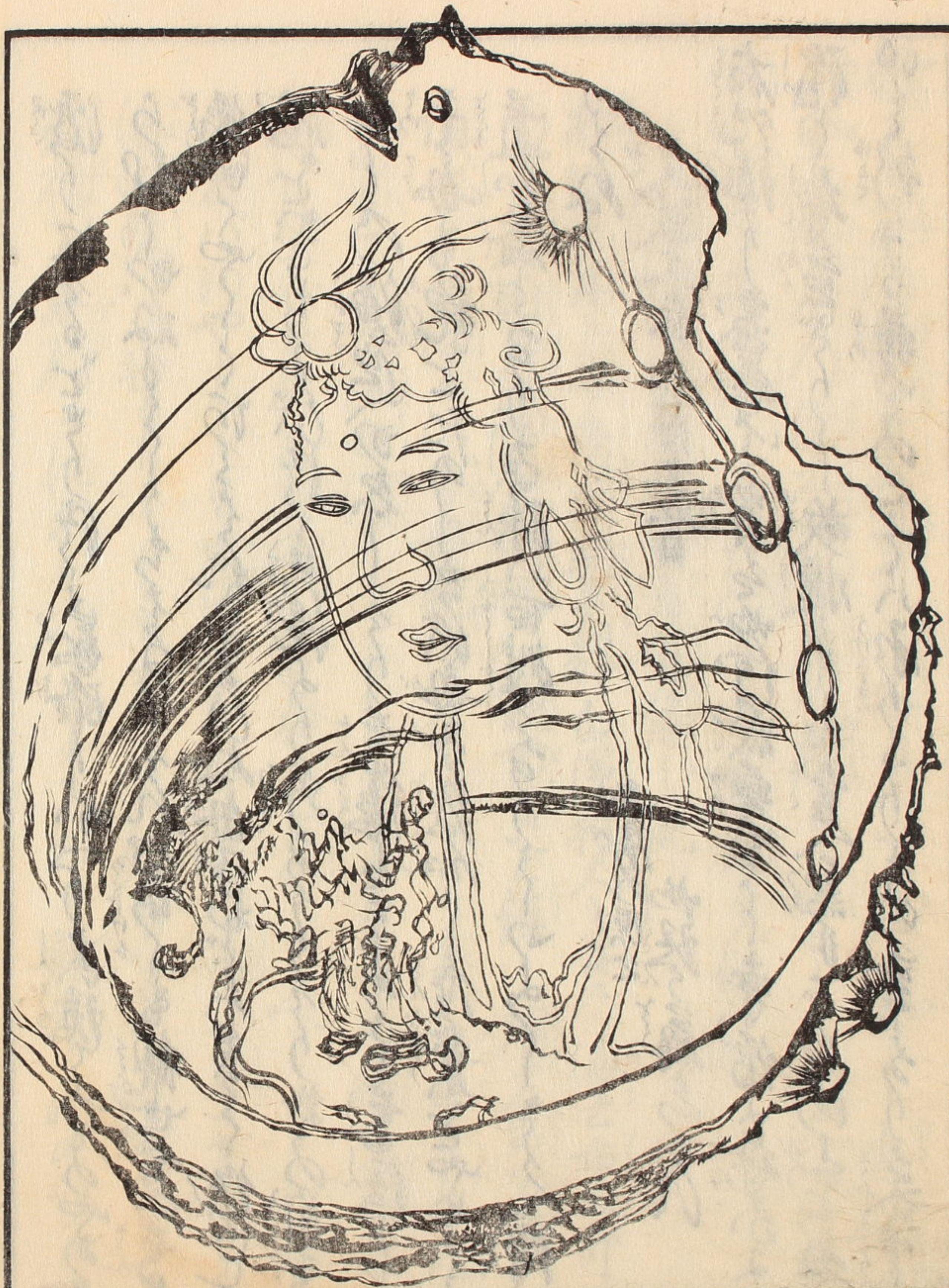
波りにら〜ら〜ら〜ま路〜ら〜ま珠〜ら〜
ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
像のや〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
罪とあ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
〜の海産〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
母も龍とたの〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
道心者〜ら〜子孫ハ百姓〜ら〜ら〜
〜ら〜

安房の徳士

如琴庵の慈り

文政十一年二月十日

右記海り靈夢の宵に也行成夢〜寺僧の母は
龍の母とた〜ら〜故に〜ら〜
ゆ〜ら〜る〜夢の〜ら〜ら〜ら〜



貝乃ちぎ

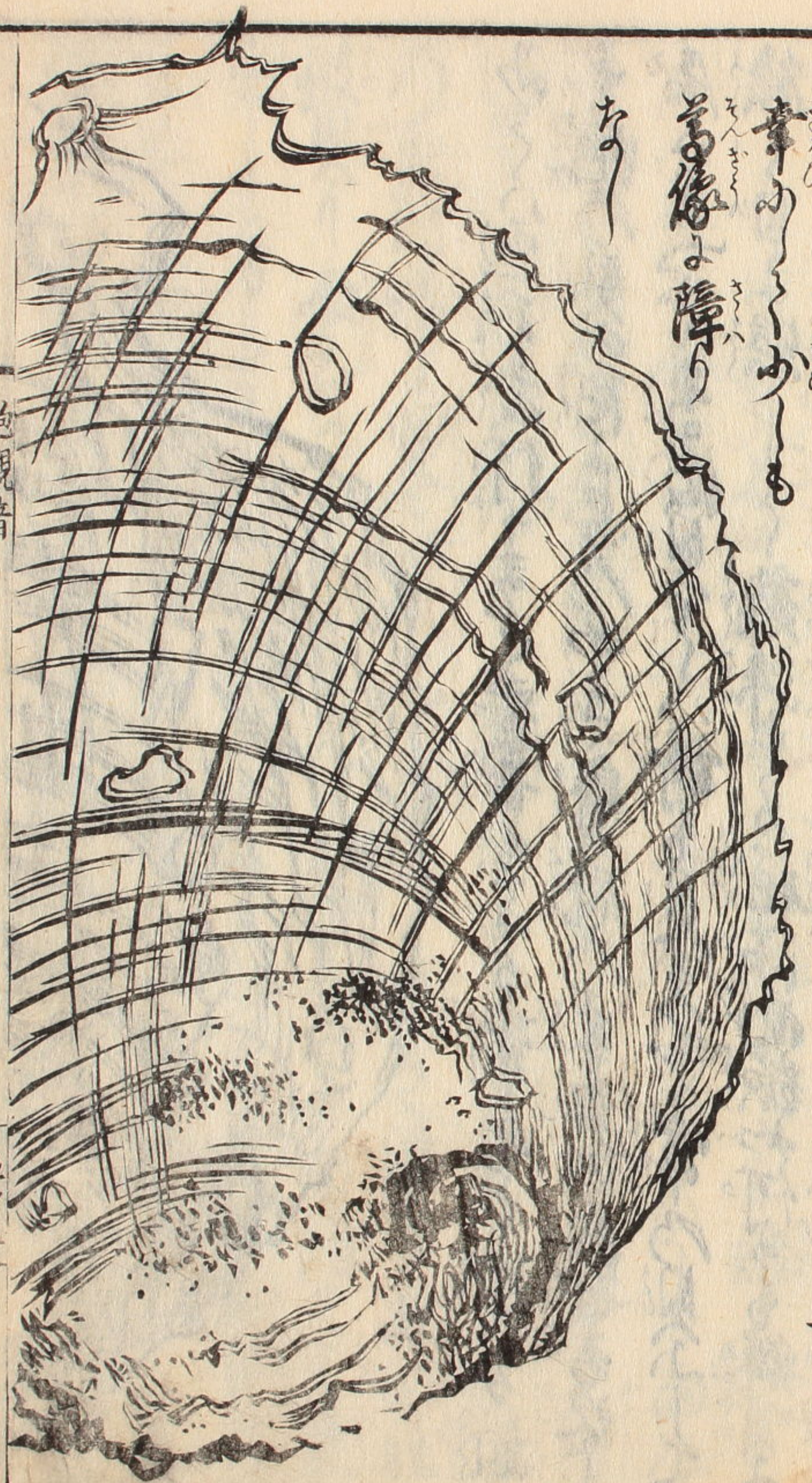
はみりのよ

おちひるの艶の石雲のどく欠換へるあき

幸め

善縁の障り

なり



艶観音

五ノ三十



めくくある愛竹くまぐ重苦をく事なく思ひぬ
 土地の貝の肉は乃の如き寶冠の事此の親世者現
 居くまぐ多波貝く一初も貝をく常の貝ふく
 能く目よ照く熱汗もく此は西嶺如竹も鮮明よ
 一く生山の如く美野の陸地まく此凡の名画之
 画の西僅美濃紙二枚此も言く成居くまぐも鮮明せ
 篤くお目金くハ美く赫耀く鮮くは貝彼氏

家りて修む事の事には年込菜去ハ橋宮乃刻由言
 吹出さく救金と購ひくはらまくかおの中なりお
 言事寺ハ浪居く念佛院く言くは寺に家居成
 居くは相又谷中明林寺の常杉房くは緒く
 友の貝をるむく靈験もく笑乃び居りひく南居
 正月十七日夜く少而海路次悪友く是を回十八日大所
 河原の大所ハ系指す一東運寺くも言事東くは東運寺
 の西化の活ハ回冬来之くむたく乾く強く故け能
 彼貝りぬをくせく言事此く少く言事西居て言事
 言事くも言事くは妙成事く言事くは言事くは言事
 事くも西化言事房く言事く言事くは言事くは言事
 經年言事言事一七日の内漬酒飲くは言事此く

海中に生ずるもの故をいふに靈驗物語と事と存
との言放たり。別は水天の法うごい終せらるるに
流りて母に何れ外の法は終りてしるる事共
必七日の内よむを流りしるの言と余の事共
初念をいふもや。同り一夜も初念せし事なり
事故存り大病人等半座の事と初念うたまり
名は靈驗ハ多しと勸めありしり安齋隨筆う云
池上本門寺ノ僧来テ談話ノ序ニ本門寺ニ蛇貝ニ南無妙
法蓮華經ノ文字現タルアリ貴キ事也ト云予聞テツレハ
細工物也予作テ見スベシトテ作り置テ他日僧来リシニ
見セタリキ其製法ハ蛇貝ニ佛像ニテモ佛名ニテモ生
漆ルシメウヲ以テ書テ蛇ノ穴ヲ蠟ニテ塞ギ漆ヲヨクカラシ

テ酢ヲ十分ニ入テ二十日程置テ叔酢ヲ砂ヲ以テ能磨ケ
ハ漆ノ付タル所高クアラハル、也是無益ノ戲ナレドモ如此
事モシリ置ハ僧ナドニ訛サル、事ナシ奇妙不思議ハ皆
造事ナリトソリ予も漆の書簡原ノ酢と入テ腐
〜文彩と造る事と安齋〜知居る事と〜は観音
ノ事と其〜疑と生ト兼り奇妙不思議ハ皆造
事也とのいひの〜殿り其の巻は記〜河大神宮
文字本中ニ出現の事ハ本の流〜出来たる人他
ありて〜巻は記〜並り橋本明神ノ奇異九の巻ニ
記〜河大神宮ノ靈驗并本木の事ハ造り事
あり〜今眼前に九人の見〜知る〜の奇
不思議あり九例の〜改〜並〜美と約〜

吾々の海と見ゆる人の色り住するの

蝦蟇と蟹と変じらる事

其蟹と化じらる事

爾大水に入らば蛤と成稚又蟹と成舊化して鳩と成る
類之月令の載る所新垣の茶籠と成蟹の蝶と成の類は
元人の見ゆる所よ〜〜〜蟹の長海花
と成回歩蟹の尾鰓魚と成の類は相産家の種やん
よ成る色くも餘りの変化不審の思ひ居る
予が友佐枝何某の家尾張の國津浦ゆくも子蟹の
尾張〜〜〜蟹の食と成り〜〜〜蟹の
蟹の何れも投じても蟹の食と成り〜〜〜蟹の
見ゆる所の蟹が〜〜〜の世〜〜〜又吾居
吉右衛門も名古を庭中寺前て津浦の里にお夜を日へり

〜〜〜世〜〜〜予の名古を〜〜〜人々のたき〜〜〜一夜も
変じらる所と見ざる故に絶り成世と成るも不審の
事と思ふハ予の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の
事と〜〜〜載せ置之國〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の
事と名古を〜〜〜の事

吾居在庭の見えるハ
蟹の〜〜〜



蟹の足生居る事

佐枝何某の見えるハ蟹の
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の



蟹の足生居る事
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の

又或人の蟹の蟹の変〜〜〜の事と成

唐に平が下男幸彦の家四宅知於戸田村のそのるが
 右村のハ刺と毎々蟹と成事うう成想りも折く
 見ありて成愛ううと云故為と安又刺の蛇と佩る
 ありに肉細長く出くま出くる肉よ色生く足成やえ
 蛇と脱く〜案文とあびつる蟹と成り〜又右幸彦の
 親なるもの云ハ蟹持遊遊る由長油花と成そのぞ
 心と付く見並〜と尔さき〜も幸彦ハ一夜も見
 ざり〜と〜の莊子の道遊遊〜親化〜鵬〜成その
 事も偶云とも云が〜造化の
 ぬハ人智の及ぶ事〜は〜も
 幸彦の見くる変化想りの姿と
 回人よ安行〜也〜並ぬ想〜



虫鳥の類の變化の事ハ本草総目云鳥信ホリと
 檀の變化の事貝と云り〜月或人の變化ハ下巻の
 四香取の浦ハ海に瀬澤山ハ所〜縹と云魚の化
 あかの〜海人の〜縹の腹よ〜す〜もの縹も
 ち〜云又蟹も世あり多〜海と云鳥よ成〜半ハ
 蟹も〜ハ海人の〜も〜〜ハ縹と云海人の事
 〜〜海瀬ハ〜と〜縹ハ〜成〜ハ云信も云信
 ち〜事〜海瀬ハ油款〜縹〜成〜遠ひつる
 そのあり〜地〜任〜人よ安ハ縹の胡蝶
 變〜想〜成ハ折〜溪人の細〜入事〜も成と
 故〜也〜捕成〜事〜の言故〜變〜想ハ
 成〜成〜母〜母常ハ縹の鱗ハ下よ也

生出一一 鱗乃回より毛取も居るまゝの生感り
たるや頼うもの胡狼は変り居るに絶く見やまは
右の赤丸浦の色より居るに鱗乃下は毛生
しつより後、恒場布と改る事と見えたりとせし
目蟹乃乃は我怒りも一夜も見えざるにやき
そ去の老漢は出云と侍く妻妾に絶つと思ふ
うもと云ハ、跡の事かと思つる具も造化の妙も
人智乃乃ふ事よ此也

源道玄猪と截つる事

源道玄を信別小孫、小泉村に土小泉を右後乃乃男たり
中年より信別出くも、留業と認め人よ知るまゝの
頃より予、知己とありけり、人よ美藝も人よ長出と

なるんは、武藝と好く、歌舞、蹴鞠、柔術等、技藝よく、は筆の
頃、四神取くと周遊し、ま先くも、武藝の作と作
がも、致せき、人よ、源道玄、伊予、赤松、を、頃、乃、肉
狗、嶽、乃、色、乃、山、乃、色、乃、追、く、行、く、所、乃、所、乃、
僅、乃、平、地、乃、人、亦、漸、二、十、軒、斗、乃、田、畑、更、乃、く
皆、山、嶽、と、業、く、外、山、嶽、の、ま、ま、波、世、く、ま、か、不
あり、一、武、時、道、玄、乃、云、く、各、達、乃、猪、と、稱、する、は、深
お、あ、ま、一、夜、見、物、は、夜、乃、の、く、ま、ま、く、る、は、若、き、ま、の
く、ま、ま、先、生、と、は、ま、ま、け、り、河、に、追、將、と、釣、せ、ま、る、と、せ、ま、も
ま、長、た、ら、者、乃、の、く、ま、ま、時、乃、思、ふ、ま、ま、追、く、よ、成、る
な、く、ま、ま、追、く、矢、一、居、く、ま、武、時、彼、者、乃、信、乃、仲、春、と
た、り、猪、も、ま、ま、り、出、く、澤、乃、く、牽、き、居、る、ま、ま、明日、冬

手勢もく山へ入猪と追集は後に入中ぐりる松共の
手際よりハ清恵の心は南河をうへへてまて
未明は食事とあつめてる後六七人の大二丈と其のあ
り山路より入るまて山を雷澤へ下り妙り居ると
とけ居るまてまて居りてあはれも自由のいづれ
後ノ裏は打つ出のどとをまて山へ入るまての徳の
少し給るちふあふれへ先生ハいり侍居るまて
我ハ心方へかけ入るいり猪と追出へ中居るま
澤山へ心仕留るまて後より又いり居る集り
大猪と追出へ猪と追出へる時ハ声と合へて
中より下りたあまの時を猪と追出へる時ハ
の先達より中へ大切ハ心仕留るまて然り教へる

唯き人跡へまて皆ちりくは深山へ分入る猪の
きりり出へる時ハ牝猪を大に牝猪二千丈も四丈も付
纏ひ居る歯合より血と流へる事ハ成り居るも
一向平氣の極みより羣居りてあまのいり時ハ彼も
多居り月をまて人とも一向思まてあま歌より
居るまて猪種ハ遠方乃若くはぼんくと狹地
乃若くはあま出まて肉は谷一川向の方より遠り大乃
吃る者あまのあまは是れと見ると猪十匹並び居り
唯大一丈のあまのいりに吃然り居る事をと思ふ
間も形も幾く見ると居る肉は豆腐より何んと然る
也く雷中忽ちいりけと成り支切大乃声の止まるハ
猪り然るまていり相遠るに僅谷一川向の事なれば

うゝ見ゆきどもそ回を違ふく楮を大御の目え大を
猫神の目ゆの取故如何も仕方うゝ新事成目よ合つか
事不使之と思ふうちよ類りに鉄炮の青谷くよ書さ
見りて虫傍の谷るよりてあこの方へ大楮定たきりて
けありりる是はうろくは姿よくは若へ三足束きくハ
凌ぎ難めりべとふもさくへ光りく巖と小楮よ
形く侍怒くもども是場悪補まよ本下乃難ゆゆ
刀あまハ河うるべし討付く脇差よく討面べと刀ハ
巾着もく本の枝は結付並行ハ本よ刃付居行のみを
扱身と持く侍怒るもろく三足の楮今返り居る
居場へ入りてらるひ思居る故ヲ、イと書と無ると虫よ
き足飛揚り入りける故例へ討付真向と骨も徹摩よ

碎けのく切刻は鉄石よお付るくく又飛く皮のこが
とげ薄く故楮を泳たけりくあび飛怒り来るま又
目下取とつけおよ二刀まき切刻は先乃でく又飛く
皮のこがとげ落くくも始より三太刀の疵り色取の
痛も故もや楮ハ垂下乃谷へ落くくもひ思居るこの
二夜目の身の宵けく思補腹より胸へけく牙よけ
破らき衣類も無刻くくも負血眼後流き出れ
中くく虫ととも面も有餘くく是ハきくゆぬ事よ
そり頼も切くる是乃眼差く人背きくく又飛く
切刻事もなきも今付あくく今と落まべし遠念の極
ありく思は深もろく虫は後ひく二夜目の楮けり
ありくるま今よりて今夜を心せよこま少く早く

用く切くるまゝ猪の鼻の先と切落し一り幸ひり
鼻をさしけり乃ち急なるまじしけり之底もくも鼻風を傷と
かゝるにけり返りくも是も谷へ落し先のも鼻と二疋
うめさしける又引強きまゝ今一疋の猪種り来りけり
而して向くと切し又先のまゝ又強が切割兼べし今
度とまゝと強べしと鼻と背けし前と二本とも
切落せし故も是も連下り谷間へ落行し是定うめを居
たるまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
飛揚り来る勢も是故漸く先の口と鼻ともつと
たまごも何か小まゝと山乃後より行しは本より有居
行しけりハ振身と持居進退も自由なる所は先と
平場へけりく底をも見えやと先の前へ下りけり猪

二疋とも連傍り谷間よりけり居るまゝと先と見えも是
先等と群くむけらまゝと見るよ本綿の跡入二
枚と猪の細毛まゝけり利銀も切裂くるめくも成
襦袢もきれへ腹のま中よりけりけりけりけり
乃ち一八九寸の皮底あり漢さつらつらけりけり破
し故に腹後後懐中も満ちも南成難くのく下等
めく能きまゝとまゝのけりけりけりけりけりけり
漸くかきまゝと落付しけりけりけりけりけりけり
地をよけく猪といはけり追集るとまゝのけりけり
決死とおはけり今よ又けりけりけりけりけりけり
まやりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

見えたり相々跡念を極うりくく不ろ簡なる事
扱と頻り又後悔とたり勇奪もたゆまざるも
は姿のく受へ居るも仕方もうくと奪分を引連
先之丈を引は留る事故中然るまけきども頭骨を
刺るる切棄てて二刀を引るるも成す外鼻と切を
切なぐり〜皆く見せ若者切極之重く来るべせめて
一丈と胸切う又ハの行り又後度よの今度ハ是場
よ身は取らぬ〜刀の〜切割極〜と思ひ〜後者を
枝よけ極〜待用ハ速傷乃山と又大猪十丈と連て
延行故物何いせま〜と思へども取捨くハは取て鉄乃
る〜落き命何りせん一丈も澤山〜切く死後名
突ひと防がをやく取存と極め不敵よと又右の猪ハ

ヲ、イと髪と想の〜忽ち形〜速〜来り〜
想の〜必速〜
来りおとたり 十一丈跡〜ははききて義毛と違よ〜
かり〜と齒と〜
〜何と〜
能無〜
二の切教〜
〜切教も〜
是よ〜
忽ち心も勇〜
細切〜
何と〜
来り〜
八方のり花付来ると左右ハ男と者けあり

猪
截



五
十

之
卷
繪



存る切刻つゝか、實は所為事好ぐ、甚だ心地無事
うけ切味と知く後々措と切、行の造化もろく事
取の心造と一連し教(具)より先措の極り来る時ハ
かりりくく牙を嚙つゝも、善と悪と、人よむひく
善毛と逆よましく念り来る時のま早く尖る事ハ
矢の如くま回六七るの成りつゝも、少くも尾とヒヨイと
まろく尾とまろく思ふ、実付来る、同時の如く
彼尾とヒヨイとまろく見らるゝ、虫よ傍(披)え切
おのゝも二の切、成一向の如く、好むと善徳りて
頼と付き又物死ぐ中、切らるゝものあり、かゝる能
心造と事又、心造の如く、尾と十回も、善も
一文子に形と、まろく編と、思ふ、早の来る、ゆゑ、故人合

竹皮切換し、二度自然の来る、ハ、善成りの、好むと
猪之叢石荆棘の中、と、一、縦壁懸崖の間と、進歩の
事平地と、歩む、思ふ、心平地の、播負が、このこと
相切味、善と、竹皮も、出来、思ふ、月、思ふ、方の
狭砲の、善も、止つゝ、思ふ、思ひ、教、丹、自、事、
切、教、事、故、恥、愛、ぬ、働、ぬ、ぬ、危、
具、怒、後、目、遭、り、ほ、り、と、と、つ、
可、人、猪、の、皮、と、之、教、大、極、の、措、と、二、丈、宵、有、て、
け、猪、ハ、好、加、城、の、故、今、疾、沙、振、舞、中、と、一、連、持、系、り、
よ、極、世、而、の、五、松、と、見、く、さ、ま、が、先、生、故、見、事、成、心、信、
ち、感、心、う、具、も、是、く、危、り、事、も、吐、
肉、外、の、者、も、皆、二、三、丈、つ、皮、と、持、揚、来、り

まご物に討一之止の猪ハモ後死せむり傍又若く
のり居くと謂り来りくふ者ヲ業然りて未だ死切
ざらんと喉のり裁割皮と刷磨とより此の猪も皆
然りく惣ち皮も死騰もとり出〜〜〜肉は十六七
歳成童より何と云者若く成り来りは神と目々
つゝ松尾ハ先生と云思ひの外大馬鹿成事と云これぞ
折角教〜〜何の役も立〜〜と云と云る顔形ハ
斤腹痛と事之見下げ果る先生成と成ゆ〜〜是
胸切〜〜故皮乃速成也をのそ〜〜ぬ放〜〜りぬ
能〜〜因行も皮〜〜紙付〜〜ハ〜〜りても速〜〜る〜〜骨折
とんぬ駈来る猪ふ引組〜〜喉と突〜〜急而故一突〜〜て
弱〜〜を〜〜ま〜〜う〜〜りに死〜〜す〜〜ぬ〜〜と速〜〜は先皮と刷死〜〜より

騰もとりて素より肉〜〜骨と云修捨並事なれ道言
秘術と云〜〜立流〜〜お前〜〜り〜〜思ひの外童より
笑〜〜し〜〜神〜〜は〜〜皮〜〜紙〜〜と付ぬ松〜〜は事〜〜と知〜〜り〜〜と
又〜〜の〜〜向〜〜の〜〜や〜〜ま〜〜大〜〜が〜〜猪〜〜は吃然り〜〜と〜〜特〜〜り〜〜遠〜〜き〜〜方〜〜な
〜〜り〜〜カ〜〜イ〜〜く〜〜と〜〜声〜〜と〜〜聲〜〜を〜〜り〜〜ま〜〜と〜〜速〜〜大〜〜は勢〜〜ハ猪〜〜ハ
考〜〜り〜〜怪〜〜家〜〜の〜〜ま〜〜の〜〜由〜〜なる〜〜に〜〜除〜〜り〜〜き〜〜方〜〜故〜〜若〜〜然〜〜り
〜〜も〜〜詮〜〜ら〜〜る〜〜事〜〜と〜〜思〜〜ひ〜〜声〜〜を〜〜ざ〜〜り〜〜〜〜ゆ〜〜急〜〜忽〜〜ち〜〜大〜〜を
〜〜け〜〜教〜〜を〜〜ま〜〜〜〜り〜〜と〜〜〜〜の〜〜主〜〜人〜〜は〜〜大〜〜の〜〜死〜〜〜と〜〜神〜〜の〜〜外
残念〜〜なり〜〜甚〜〜ぞ〜〜歎〜〜き〜〜〜〜由〜〜大〜〜を〜〜誰〜〜大〜〜の〜〜向〜〜〜〜と〜〜〜を〜〜用〜〜り
〜〜立〜〜兼〜〜る〜〜もの〜〜と〜〜想〜〜〜〜い〜〜る〜〜〜〜ハ猪〜〜の〜〜〜〜り〜〜か〜〜〜と〜〜〜
肉中の若山〜〜ハ〜〜込〜〜七〜〜八〜〜建〜〜造〜〜〜〜り〜〜来〜〜り〜〜文〜〜と〜〜活〜〜世〜〜と〜〜も
事〜〜と〜〜猪〜〜一〜〜建〜〜造〜〜れ〜〜バ皮〜〜が〜〜二〜〜百〜〜文〜〜中〜〜騰〜〜が〜〜三〜〜百〜〜文〜〜中〜〜ま〜〜ご

竹二百年文斗とありて於合七百文猶もさるる事とては
 七百文と死とて極歎く勇と事ひ日く命がけの勝負
 のことさうして僅の生法とて送ることもいふものもさるる
 事之心國の態と捕らるる雪中は態の完(薪)とて
 今態と怒つてを逐り去るる事の中は態の完(薪)とて
 痛と突く仕向の事と着実換ぐぬまは態の完(薪)とて
 陰の穂先と指るとままたる陰の穂先とて
 痺れたまは八幡者も怒り攫る教さるる事とありて
 南給が東遊記は記し又他別も態とありて
 態とさうして態のほら態の下の態とありて
 お事と一おのさうして態のほら態の下の態とありて
 損もさるる態とて態とて決絶さるる態とてありて

勿論人とも安製事折の態とていふ事とてさるる事とて
 換るる事とて一向の事とて周遊の事とて
 戦中富山清りの大指の牛馬とて取寄の漢舟とて
 一あふとてさるる漢人毛と指らるる故の船中とて
 宣森とて侍くバ箱窺ひあつてもと矢船のさう
 然ると目早に死とてさるる切落し速く滑ゆ
 事とて事生死一瞬の同は國の故は仕子乃戰場
 部とて命とて塵埃のり軽んじらるる忠又義よりして
 明らるる或は天下の暴悪と陰んがるるさるる
 是一本よりさるる紀伝義光の義死とてさるる
 おの救めをさるるさるる事山海名産場會は見え
 うり皆同日の漢しとてさるるさるる武門の

家ノ生々々も即々太平ノ汗世ノ出云馬ノ袋太刀を
鞆ノ納め抱とまよふ一々其車風流と奉とて生座と
終ると云ハ忍たのぐ一皆

東照宮ノ 神徳作も思成事ノ心成遠く一々
因云云之山六海一平地一世界ハ山三下海一平下
平地ハ僅成事ノ一々山國ノ生きて山嶺と奉とま
くも野のさき事ハ極まう一々も平原都會の
地ノ任人ハ野のゆ一々積ノ働とま一々一ハ
心成と成と一々一書付まぬと時道云が野の他
人も安直且地名英主ノ名又月日おも要成安直
一々思と一後ハ何とも思ハ出と今ハ道云も黄泉の
客の移り入ぬとハ舟抱も一々一皆と組面さか

世ハ一々一々一外集の書載也一々
右條道云十六歳ノ時只一人任別まき一々秋
葉山ハ初連ノ山ノ村人ハ一々一々一々一々
性本一献出と一々一々一々一々一々一々一々
中一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
夜道切と一々一々一々一々一々一々一々一々一々
根救出と一々一々一々一々一々一々一々一々一々
事一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
野道一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
道云腹と一々一々一々一々一々一々一々一々一々
甚愛事ハ一々一々一々一々一々一々一々一々一々

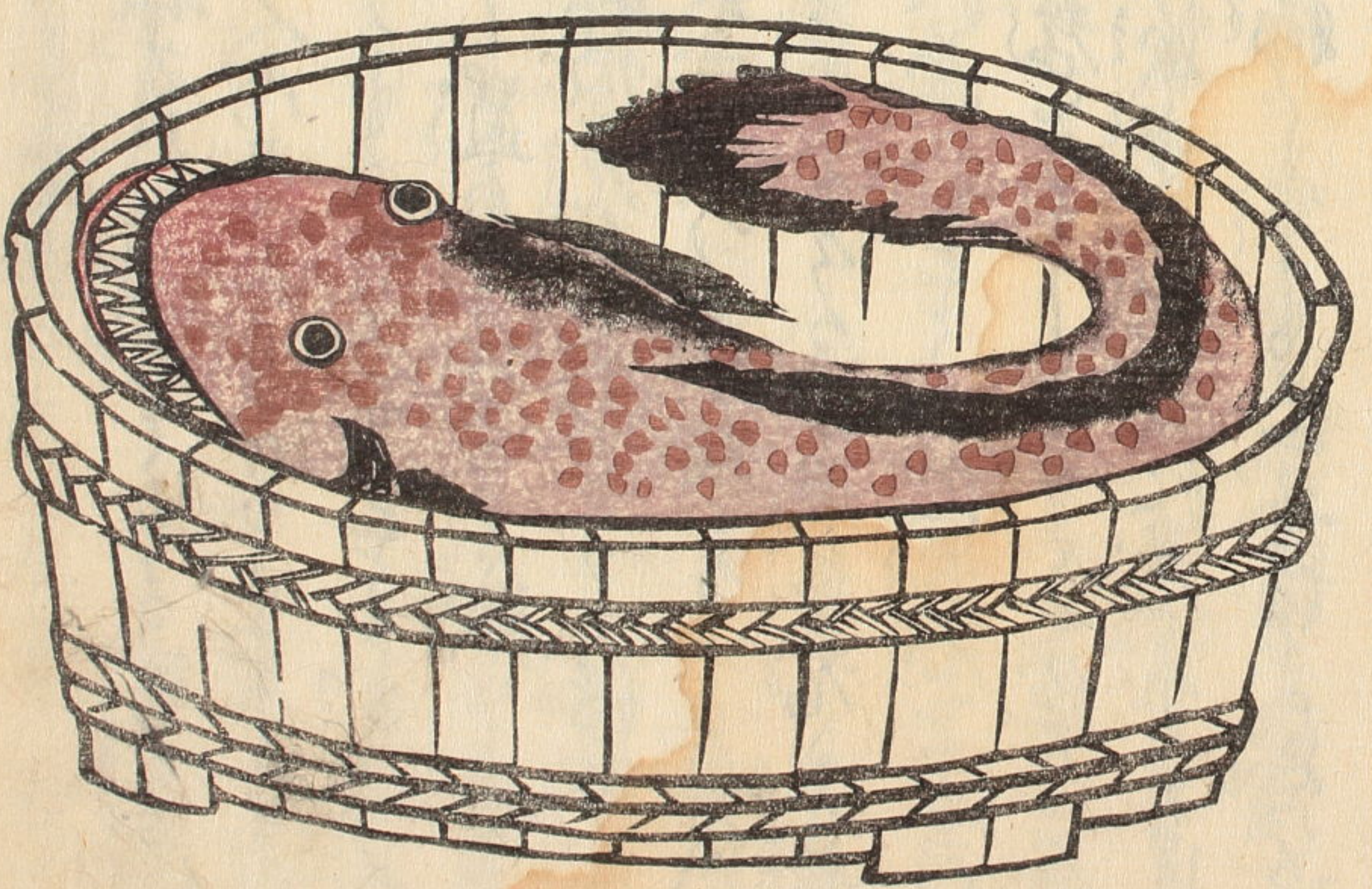
行色なる月も忽ちあまのりぬきいつりよき跡り
長くもあつ時とあふま後清うる成なる後事
解籠のあつ美魚と捕るる事

尾張の國花古巻の中中と云前の町後きよは江川と云有
川中權之旨向うと云流るる 天保八年丁酉七月並前乃事なるがは
川西より作を所と云う想波と云小橋のりくと云事の小童
大勢あ合水中へ入遊び居りりり川と云の竹と云成との
ありてありり故振返り見ると雲怪成りの夜彼童子
其の皆く驚るる唯ちぬ夢と揚る法へ迎揚りまより
くまをばと云入り居合せとる者も想集りて何事ぞと母
同よと云るごと云る故也行成との見えんると云次の
橋へ形と云のそのあると見ると云はと云はと云と云と云

願ひと云と云見馴れぬ美乃女と云の故人と云又と云次の橋
絶行と云あると云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
成はと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
誰も捕押入と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
居合せし事をと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
橋の下と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
願と云押入たきと云何ふ大美のとなと云と云と云と云と云と云と云
抱へ揚ると云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
たえむりに入試と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
漸く入りぬと云怪美の成乃方へ合と云と云と云と云と云と云と云と云

眼は去るるく歯も大派の如き歯の如く脇緒ハ尋常
奥の如く尾とまき結の如く惣并ハ鱗の如く肌
鱗の如く茶葉の如く病の如くむら肌も何り
腹の如く雲の如く後とまき後の下ハ鱗の
鱗ハ夏ト魚の時ハ生息りくくくくくくくく
左右ハ皆皆ハッ付りて形ハ先鱗奥の如く
口ハ鱗奥成つてくくくくくくくくくく
也何成奥く事分り兼りて元来ハ川の三ハ勝川
と云大川より分氷庄内川と云大川と伏龍川用氷
引く水く勝川も水派ハ山川もまきもまハ十里も
川とまきもまハ砂川も常ハあまきく龍蛇の如
種ハ剛瀬もまきもまハ江川種ハ分氷の後ハ産も見

ゆふとくハ海川の如く根の奥の任産もくくく
くくく何くく何くくく出味りくくくく
事ハぬい奥形もまきもまきもまきもまきも
温順優長なからくくく躍り鱗又ハ鱗の如く
新鱗の類と異ハ減りて産りてくくくくくく
奥と食ハ月種も活け産りてくくくく山原も
乞食く見せくくくくくくくくくく
予ハ若黨水野金流と云者ハ中下の者くくく
水とハ水中ハ魚とゆけくくくくくく
吹く書記ハ魚ハ魚ハ尾張の國ハ余國ハ揚子
山ハ倒ハ平等の平地もくくく用氷愚水くく
用水くくくくくくくくくく
魚ハくくくくくくくくくく



背せ

腹はら



腹はらよみきくは八の
ろく指先の所
嵐のゆきとまうと

どと現あらわを捕とら得える事ことなきは鮫しやうの柄がらもううせせり
多おほくの怪あや物ものもあるものものううららししめめるるもも深ふかい
水みづへへ入いるるハハ珍めづ事こと之これ博ひろ識しのし鑑かん定ていをま候まうららしし

猫俣老母の化居る事

上野の國某の村に屋敷有と汲世とある男は若
生も付津成りしき人老母を養ふ事切
らる事實に孫を養ふ事切らる事
なきばかりの母と家と残し置自若の日と感と初とと
多し福を歩むるに叔父老母の事と酒好成る
ゆゑ毎日常り酒と或合能づく者なり一母成能
りてむと樂しき事と一母年老なる故も
滋よ公と女と愛荒らるに成はきども彼者心ともの
樂しき男の事ばかりの事と一母年老なる故も
もや年もたつたに成母も次第に老年よりと
而もよ並外に事り出づ極く事も不安堵と思つた

且ハ老母唯まゝに居るとせ置ハ不自由の事なり
孝道と父の事なり世人の妻とむらる事とせしめ
はきど彼老母既とある事とせしむる事とせしめ
形も男故先々母の存念はまゝせ置つて去るが
妻と違つた事と人々勸め母を人をもとせせらる
却て孝道と父を養ふ事多し人の中より何れ
むらりしき母の事とせ置つて既も多しとせ
あまの事とせ置つてはきど危も爾の事とせ置つた
御の心とせ置つてはきど危も爾の事とせ置つた
形も男故先々母の存念はまゝせ置つて去るが
妻と違つた事と人々勸め母を人をもとせせらる
却て孝道と父を養ふ事多し人の中より何れ
むらりしき母の事とせ置つて既も多しとせ
あまの事とせ置つてはきど危も爾の事とせ置つた
御の心とせ置つてはきど危も爾の事とせ置つた
形も男故先々母の存念はまゝせ置つて去るが
妻と違つた事と人々勸め母を人をもとせせらる
却て孝道と父を養ふ事多し人の中より何れ
むらりしき母の事とせ置つて既も多しとせ
あまの事とせ置つてはきど危も爾の事とせ置つた
御の心とせ置つてはきど危も爾の事とせ置つた

おむるまゝ何と云も孝と受てて〜のびる女に
河の物も母が〜いふよと云て〜は〜
申るまでも妻よ喉とを〜後ハ〜
老母も人善とせらるると〜お成時何事〜
屋根葉仲満は家へ赤葉〜酒を〜
約束〜色後のり仕事も休〜酒をた〜者
松のものも二三粒捨へ〜の来ると待てるよ〜
何事〜人俄の用事出来〜一人もあ〜
掛〜酒も者も澤山〜河まの〜常〜
ゆゑ母も存分〜酒も〜あ〜
母も樂〜酒も澤山〜物の子〜
る色〜酒も者も連うの老母と食う〜

老母も何と云も孝と受てて〜のびる女に
喰〜心持〜外戸〜入件〜男も〜
所付〜種〜外〜に〜角〜竹〜老母〜
音の類〜よ〜吹え〜る〜竹〜
と云も〜竹〜老人の〜
竹〜も〜あ〜
心と痛め〜
出〜
ま〜と甲速大と〜
こ〜に母〜
酒〜
新の音〜

能く性乃静まりてか別をどのと名傳へし事と
思ふよりのと猫僕乃子ありてや去連もは妻と思ふ
是切も色止つては水と心と交へ先絶ては彼猫の
おもてあまんと履く徳りするは天運の有りや
能く碎つてかと思へ猫はかゝるも昔の事神ありき
近隣英村中心安き夜甚衣を年おちどと叱り
大勢持徳子の頼と頼と肉へ入る見ると猫はまご森
入居りま竹の難他もろくそ徳は生捕とろくね徳を
ひき事と篤く考見ると二年徳り心清徳も好と
ろく徳もろくもろく徳もろく徳もろく徳もろく
ろく一徳の有り徳るとりや徳り徳りもの徳るとも
ろく一回の徳徳障子ろく徳切せ外り徳は徳徳

幸乃親を食ひは猫僕が食へるも家乃肉を食
ひの徳ろく母の徳ろく徳の下圍徳裏の徳ろく徳の
老母の骨はまろく徳隠し徳は徳は猫を母と
捕食のろく母と化整り居るにお徳ろく徳も
泳驚きと徳は徳村と徳笑えろく徳徳も徳代友
徳と徳は徳と連行して徳徳もろく徳後徳は徳
徳男へり徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく徳
徳親の徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく
ものろく徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく
り徳め猫僕徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく
徳徳り徳徳村へり徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく徳ろく
徳ろく一回徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳

猫
候



五
五
十一



文
彬
三

赤い吐の皮のうらまうせ馳形〜見たり〜也を猫の
形を也何昔世のあつた猫僕より〜やうど具は尋ひ
〜に成程猫僕より〜ちささうに江戸は居る格別大の
る女猫を 江戸の大上の方のたよりハ一振大の 去るが〜大と大に
替り〜るものも〜金〜猫故顔の〜大よりハ甚う〜
を顔の大さうる格好ハ少〜猫乃別合ちが〜見馴ぬ
ゆ急陣の外さ〜〜身是も大乃お川魚も六川魚
何り是も大と見入る〜り〜ハ甚う不格好よ見え
赤い乃茶〜白黒の〜〜虎乃長き〜半是又
大〜はちひよお遠〜〜猫も〜先七八寸程二匹
〜と腹〜あり居〜酒ハ〜夜二匹及び香〜る〜
畜生の漢〜〜思ひ〜ぬ養食よ〜らと

奪りも〜男と墜〜〜能〜時々のあるのや
件の大さの目〜初〜時を早演〜大格好は三重
赤い〜色夜拾〜人〜番と〜居るは猫と向き
奪りも〜う〜〜〜居見物の〜立見
彼も〜は驚かぬを細〜〜目と鼻〜〜〜眼申の
突〜大や馬〜と大遠い思ふを眼鏡〜を砂に
寄〜眼を如何〜ら〜且〜格好の恐ろ〜め
〜〜思ひ〜るは去〜〜思ひ〜るは去〜
居る格好も〜も同心の〜際を見〜出入〜〜
見〜〜り〜〜今〜〜彼地〜〜は強〜る〜
主猫僕隊ハ目前よ〜〜村の名件の男乃名猫主
〜も妻あ〜〜能〜〜二十とを餘りと

終つての筆記せしるを忘るるは多しは事ハ人の
 年の事くも再々改定せざるも亦も其後の若し年号
 うごかぬもその如く畿川の年の事と号せざるは故
 重時年と保元一見たり寛政八年頃のことと
 ありしことなり

武別在原弘光澤村赤松寺 漢陽大明神 可雲和尚に云と
 因に日向國まのり彼男ハ福と揚ひ一特何ぞ考り
 乃復美ハありりし福とあぬハ九史の事ハ多ハ
 正覺の如きと新計り而考り考る者も世ハ殊異事
 ありしハ多しと竹の賞ハ亦も多しと押さるぬハ
 一条ハ揚る人ハ化する事ハその事ハ此も他日
 考り傳と撰びなハ必加へ入る事ハ其之と尋らる

ともいふと改るるも今嘉永二年より八十三箇年の
 昔の事なり 平年若成時分故別と是亦の事ハ
 心算と支漏一色く御念の極ありものと人ハ尋ら
 りしと心算有べき事也

馬本於化する神社の事

京下加茂の神社ハ古俗比良本大明神と稱する社也
 鹿養の事と願ひし御坐敷地の後ハ先ハ於の本と
 上も外の本と名するものもあらしむと辨るよその本
 皆於て変化すると改及び居たり 平天保九年成候に
 ありし時迄に社ハも素直なり能く見侍るよ神社
 の月方六回もありし人権の本もも皆於る事と
 生ハ大神全本於て成る多し 其本橋も後本殿山施等

松林南天本庫白林正本よるも松と変化ありけり
取ら末と推しつるまのりく僅り葉と然りけるも
又植てくくも末とあしと葉と然りける南天正本松
りりく右非松の同と植る場もたゞ且降りも
入難く故地の外よるをくく植り者もくく悉く
変せしく右非松の同よ接骨木の本に植もり
竹もも接骨木の葉と生じく松よちりく松よ見
松よもも押合く植込る中もくくバト枝よ松と成
然り居くも松とハちり葉とり玉椿本庫松よ本振
系振とも松り似あするその故変化然りり見合け
くくく松りりも松と成居はききも山梔子松と幹り
小枝よ西のくくくりりく本振も形り居るも末と
りり

薄く葉も厚あよちりりも葉よ角と生し居て
松の葉よ変化然り居るも幹よの推合ハも
みく本肌も末とくく松なるも多し中もくく南天ハ
列く澤中り細めもくく末とくく松と然りける本
多りりく南天ハ本振系振もちひよ遠い居るも
末とくく葉よ角と生じく松の葉なる居りり松
書解き難くも形りりるも末とくく松と然りける
くくく南天の葉形ハ松の葉と異なり南天は葉
際家の松本葉平かと京せりり僅二葉及びも厚く彼
地ハ多指くく日あるよハ松樹もくく松と異なり
くくく葉ハ色も角生を松と成居るハ列く松思
成く松と然り見たり松と異りくくく松と異なり

南天の本推葉振も早速に葉も
 高の如く南天の傍めく葉も

南と生じく枝
 ちり居きり



何れは沢有奉や先前く南天と
 多く網の奉よて後武子すめはす
 東の網のの雲せざる南天も多き
 雲中も網の奉ゆるのよやけの
 まく能枝の葉と雲居るも散枝あり

一故そ本をまうと心と面く尋ひ索もも板橋乃
 夏くつらハ一機もや一気早急く変化してたの終り成り
 奉と見えたり兵も神佛の利益ハ懐安とよ量り難き
 とのこ 伊豆の國ハ瀬川神の本ハ同侯 ねは神の奉ハ都府下宮後ホ
 ろと見えんぞ竹の神よかりゆせよ名くよ尋ても唯比
 良本大明神とり奉の之知居く近來京地くハ十社あり振
 立奉流りや出 け神もそ角よて糸須人多く元人の
 志る社つるも神群ハ多り兼りり何社況の勢と起り
 吹探るよ祭神ハ素盞高言く 定社武内乃清神もく
 別出雲井於神社とてり大葺舎新葺祭の四社奉て交
 のおよ同りかりゆまて四社もく地至乃神よては清社
 より西今乃京よゆりて出雲大路入を出雲の御さぐり

地名も社あり出—回号の由
文徳天皇仁壽三年の夏四月鹿鹿流行人民疫死多し時
勅使付社り奉向の初社人々社うりま—鹿鹿の疫
社接ひ除く—と—鹿鹿ありま—比良本大明社と作
ま—と—比良本比—良本比體牙本乃海濱あり
ま—と—右社の日記よと見え又除夜—人家の戸のよ
終の枝と—夜社と—と比良本大明社の鹿鹿—と
傳え—由今の世よありても小児の鹿鹿の憂と除んと
く—社よ新願ま—必々験あり鹿鹿—と—怨も
角も娘の由り美本終—變化と—と—社あり
室—の—事ハ—と—思—と—も—事—
想山著聞奇集卷の五 終

後
三觀成宗

三妙想坐辰本篤奉三教子方外出及也
以善書聞文道極廣奇談異事聞而識出
月益歲多恐其久而遺忘也乃録爲數十
冊名曰著聞奇集談雖俚俗事係報應意
欲福出以爲子孫勸懲出資也子以爲談
也事也已謂出奇異不常奇故久生不

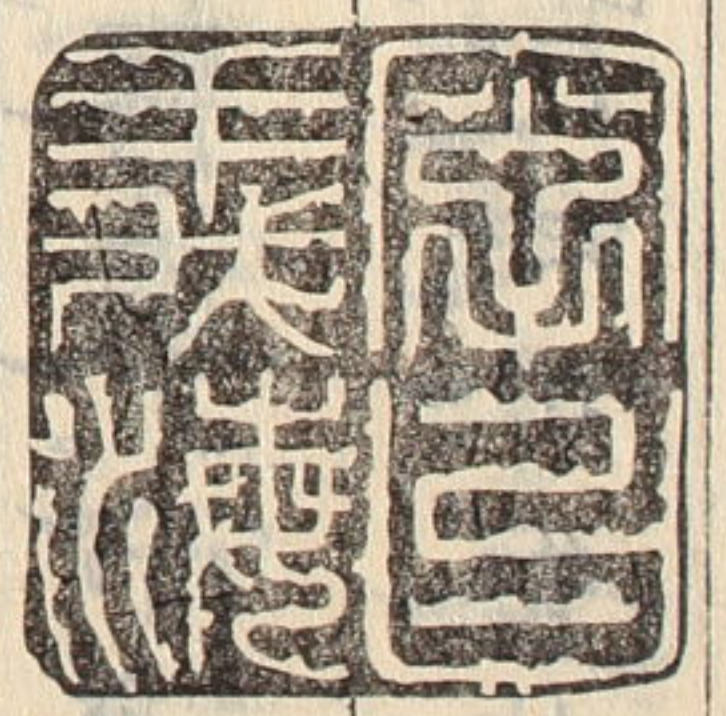
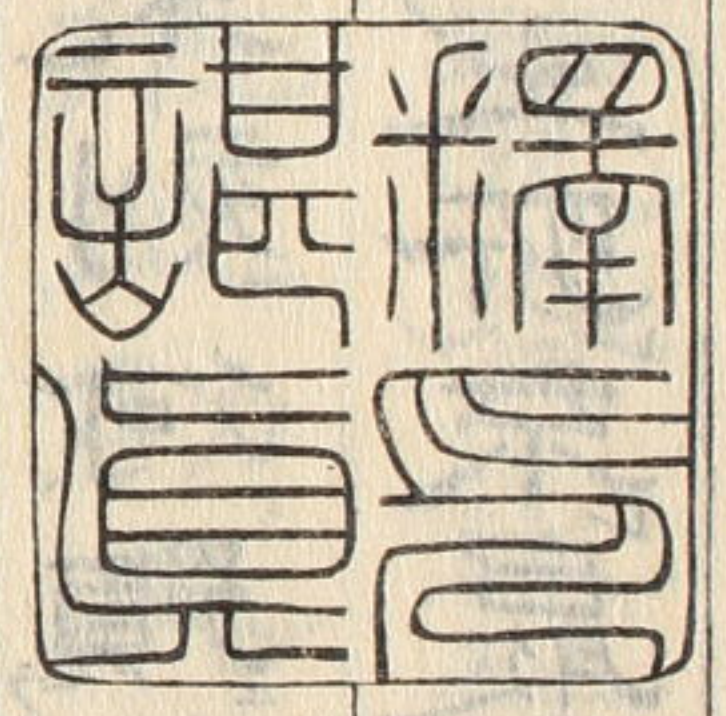
疑則謗。疑信焉者鮮矣。今居士必取其的
證詳與。與末與地與時。鑿有徵不墮浮虛
無根。出言足以取覽者。出信斯可以爲衆
善奉。行諸惡莫化。出助矣。方今
昭代。出化苟有裨益。亦教者。槩皆鏤板。公
諸。夜況此集。哉宜爲天。夏後夜勸懲。出資
也。奚止爲一家。出繫哉。恐患刻。出居士謙

讓。不皆曰是矣。足以傳也矣。會與門久濃
州。苗木藩。士青坐。坐來訪。予而谷精舍。因
試言。出青坐。坐喜而從。咳固請。居士稍贊
命。入嗚呼。刻與不刻。何預吾事。而諄不
已。乃一片利物婆心。出所不疑。已也。亦吾輩出
任也。不知者。以爲妙事。與復何傷。若夫辭
藻。出末則居士出所不屑也矣。予亦奚暇

論スル焉

嘉永三歲次庚戌益春念八日江都鎮護

坐蓮堂真



苗木藩

青坐直意漢隸



不可思議と云ふは人の心は不可思議なり
均如き心なりと云ふ也坐言の草木道の師
想山大人は筆の師人の心なりと云ふは
人は福心なり一匹はは福心なり如婦
婦多如心なり人の心なりと云ふは
心なり筆なり一は心なり筆志なり一筆
心なり多如反古なり若干心なり及心
心なり人の心なり人の心なり心なり

初戀の爲に中へうとて冊子に書
きよとていふに後へ大人書に書
たひくと書冊子とたへうとて人
又毎句へ久き様本より編りあ
録き入るるをなすけ雅に
なりきとて書もたへうとて
ましとて書もたへうとて
かへ書もたへうとて

二冊に書りて中へうとて冊子に書
きよとていふに後へ大人書に書
たひくと書冊子とたへうとて人
又毎句へ久き様本より編りあ
録き入るるをなすけ雅に
なりきとて書もたへうとて
ましとて書もたへうとて
かへ書もたへうとて

あしはら


青山直意藏



津坂光霽書

早川可静刻

嘉永三年庚戌十一月刻成

